
桜の刻

ShellieMay

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の刻

【Nコード】

N6054M

【作者名】

ShellieMay

【あらすじ】

巴探偵社所長 西園寺歳文は、ある誘拐事件で市村桜と出会う。

彼等の浅からぬ運命とは？

桜の懐中時計に秘められた想いとは？

序章（前書き）

探偵物を書いているつもりが、気が付けば恋愛小説！（汗）
歴史上の人物や出来事が出て来ますが、あくまでフィクションです
ので、曲げちゃう所は思い切り曲げちゃってます。
ご容赦下さい。

序章

花が舞う。

今年も桜の花が舞う。

ああ、あの時と同じ満開の花。

あなたと過ごした、あの季節を思い出す様に一陣の風が花びらを舞い上げる。

楽しいばかりではなかった。

むしろ、苦しい思いが多かった。

それでも確かに光る、短く淡く儚い想いがあった。

桜の花にも似た、花びらの嵐の様な一瞬が…。

今度こそ、あの人に会える？

本当に？

あの人と瞳を交わした刹那、私には感じる物が確かにあった。

「信じよう。」

一人呟いて、私は歩み始めた。

第1章 (1)

その女性を初めて見たのは、岩崎邸の居間だった。

岩崎氏の長男清志君が誘拐され、犯人より身の代金の受け渡しの手簡が投げ込まれたのだ。

そこで我々、巴探偵社に依頼が舞い込み、岩崎邸の全員を居間に集めたのだ。

「それで、警察に連絡は入れられたのですか？」

この男は、藤田剛。冷静沈着で度胸もある、信頼出来る俺の片腕だ。「いえ、警察にはちよつと…。出来れば、あなた方の手で解決して頂きたいと…。」

テーブルの上には俺の、『巴探偵社 所長 西園寺歳文』と書かれた名刺が置かれている。

その名刺を弄りながら、汗を拭き拭き、岩崎氏が説明する。探られると、不味い事でもあるのだろう。

其れにしても、我が子の命よりも、己の対面か。

「犯人に、心当たりは？」

「それは…。」

有り過ぎて、分からないといった所か。

応接セットには我々の他、慙然とした本妻と、泣き崩れる妾である母親が座る。

「承知しました。それでは、私共で全て対処させて頂きます。」

「ちよつと待てよ、藤田。この脅迫状には、身の代金は女が持つて来いと書いてあるんだぜ。」

そう声を掛けたのは、川崎真吾。腕と度胸は人一倍の、俺の腐れ縁の幼なじみだ。

「所長、如何いたしましょう？」

「そうだな、うちには女性捜査員は居ない事だし、こっちで誰かに

出て貰うしかねえんじゃねえか？」

部屋に集まった者達が、一斉にざわめく。

「あたくしは、嫌ですわよ！」

本妻が、汚らわしいとでもいう様に、ハンカチーフで口元を押さえながら言い放った。

「わ、私が…私が…」

と、母親が岩崎氏に懇願する。

「申し訳ありませんが、貴女には無理でしょう。とても冷静な行動はとれそうに無い。」

そう説く藤田に、力無く頭を垂れる母親。

「誰か、清志の為に行ってほくれないかね？」

再びざわめく室内。

岩崎氏は、10人程いる女中の一人一人の顔を見た。

「お願い！どうか、清志を、清志を…」

母親も泣きながら、懇願する。

気まずく押し黙る女中達。

「だから、女性捜査員置こうって言ったじゃねーか。」

「今此処でその様な事を言っても始まらない。」

「さて、どうしたもんか…」

と、俺が腕を組んだ時、

「あの…、私が参りましょうか？」

後列端にいた女中が、名乗りを上げた。

再びざわめく室内。

「行つてくれるかね？」

岩崎氏は、女中に走り寄り手を握り締めた。
年の頃は20歳そこそこ。

取り立てて言う程の美人では無いが、大きな瞳が印象的な娘だ。

「いいのか？身に危険な事が及ぶかもしれねえんだぞ。」

「はい。」

そう答えた、曇りの無い真っ直ぐな瞳。

「分かった、それじゃあんたに頼もう。岩崎さん、金の準備を頼みます。」

「分かりました。明日の昼までには。」

受け渡しは、明日夕方6時。

それまでに俺達は準備をしなければ…。

「それでは、また明日伺います。」

岩崎氏と打ち合わせを済ませ邸を出る時、玄関まで見送りをたその女中に俺は答うた。

「あんた、名前は？」

「…市村：市村桜と申します。」

そう答えると、また真っ直ぐに瞳を返した。

「さてと、どう思う？」

車のハンドルを切りながら川崎が訪ねる。

「商売絡みなのか、ただの金目的なのか、どちらにしても犯人の詮索無用つてのが気にいらねえ。」

「一応探ってみるか？」

「ああ、頼む。」

「あいよ。」

面白い遊びを見つけた様に、真吾は鼻歌混じりにハンドルを操った。

「所長、内部に手引きした者の疑いも捨て切れぬのでは？」

「あの本妻か？あれにや、そんな度胸ねえよ。」

「では、雇用人は？」

あの場で見える限り、怪しい素振りを見せた者は居なかった。

「あの娘は？」

「ああ、可愛かったよな？あの娘。俺、あの洋装の女中って好きなんだよ。」

「あれは、ハウスメイドというのだ。」

「へえ、よく知ってんなあ、藤田。」

「常識だ。」

危険と知りつつ名乗りを上げるのは、見上げた忠誠心だと思うが、彼女の反応は確かに符に落ちない点もあった。

声に…あの瞳…曇りは無かったが…

「どう思う、藤田。」

「あの対応、一介のメイドにしては、肝が据わり過ぎかと…。」

「そうか…。彼女に関しては、その場の行動如何で対処する事にしよう。」

「了解しました。」

俺達の「巴探偵社」は、上野にある。

途中、調べ事のある真吾を下ろし、藤田の運転で俺達は戻って来た。以前は、英国の貿易商が使っていた自宅兼事務所は、全てが西洋風な佇まいだ。

ドアに取り付けてあるベルが鳴ると、しばらくして割烹着を着たキヨが顔を出した。

「お帰りなさいまし、坊ちやま。」

「ああ、今戻った。」

「只今、戻りました。」

キヨは俺の乳母で、齢60を越している。

男ばかりが住むこの館の一切を取り仕切っているが、最近歳のせいか時々辛そうだ。

何度か女中を雇ってみたが、この館にはどうも長居が出来ない様だ。キヨに原因が有る訳では無い。

原因は、男共に有るのだが、それは致し方ない。

「それでは、明日の準備を…」

それから、俺達は準備に追われた。

その間も、ふとした事でもたげる彼女の顔。

何故気になる？

名乗りを上げたからか？

以前、どこかで見かけたか？

しかし、記憶の糸を手繰り寄せても、その顔は出て来なかった。

翌日、昼過ぎに岩崎邸に出向く。

岩崎氏は、約束通り金を用意し、旅行鞆に詰めてあった。

市村桜は、真吾が期待したメイド姿では無く、グレーのツイードのワンピーススーツを着ていた。

恐れる様子も無く、慌てる様子も無く、静かなものだ。

時間が迫り、俺達は車に乗り込む。

取引場所の廃工場は、ここから車で一時間程の所にある。

乗り込むなり、藤田は、彼女に探りを入れ始める。

出身地、以前の勤め先、岩崎邸に雇用された経路、どれを取っても不自然な所は無い。

ただ一点を除いては。

「お前、恐ろしくは無いのか？」

「はい？」

また、真っ直ぐに見つめられ、俺の方が視線を外した。

「今から行く場所には、命の遣り取りがあるかもしれねえ。銃だつて、ぶつ放されるかもしれねえんだぞ。」

「そうですね…。」

そこで初めて、彼女は視線を落とした。

「怖くはねえのか？」

「全く怖く無いと言ったら、嘘になります。でも、皆さんの事を信じていますから。」

真吾がヒューと口笛をならし

「いいねえ、信じてる。いい響きだ！俺は好きだぜ。」

と、喜ぶ。

驚いて目を見開く、後の二人。

先に口を開いたのは、藤田だった。

「何故、初めて会った俺達に向かい、信じていると言える？何を根拠に…」

いつも冷静な藤田が、いつになく狼狽えている。

「さあ、何故でしょうねえ？」その様子が可笑しかったのか、彼女も笑いだす。

運転席では、真吾が大爆笑していた。

俺は、苦虫を噛み砕いたように一人ごちた。

「お前等あ、氣い引き締めて行けよ！」

廃工場に着いた時には、辺りは夕闇が迫っていた。

市村桜を指定された工場の中央に立たせ、俺達は打ち合わせた位置に配置を完了する。

ほどなくして、車の止まる音が。1台？いや2台か。

猿ぐつわを詰められた少年を囲む様に、3人の男達が現れた。

男達の手には銃が握られ、その内の一丁は少年に向けられている。

「金は？」

「ここに有ります。」

「見せる！」

彼女は旅行鞆を開け、中の札束を見せる。

「よし、持って来い！」

「坊ちやまを離して下さい！」

「何だと？」

気色ばむ犯人に、彼女は毅然として言い放つ。

「坊ちやまを、離して下さい！」

リーダー格の男が隣の男に顎をしゃくって指示を出す。

指示された体の大きな男は、太い腕で少年の肩を掴み、銃を突き付

けたまま彼女の元までやって来た。

彼女は、犯人を睨み付けたまま少年を奪い、素早く猿ぐつわを解いてやる。

「っ、さくらあ、さくらあ！」

「大丈夫ですよ、坊ちやま。よく頑張りましたね！どこもお怪我はありませんか？」

少年は被りを振りながら、彼女にしがみついて泣きじゃくる。

不意に、少年を抱きしめていた彼女を、男が後ろから羽交い締めにする。

「兄貴い、こんなに簡単に金が取れるなら、この女とガキで、もっと金引き出せるんじゃないか？」

「止めておけ。」

しかし、大きな男はそれを無視して、

「それにこの女、ちよつと可愛いしよお。俺好みだ。」

そういうと、彼女を床に組み敷いてしまう。

彼女の名を呼び続け泣きじゃくる少年に、

「坊ちやま、逃げて下さい！」

そう、抵抗しながら彼女は叫ぶ。

こういう展開になるとは、迂闊だった。

俺は、離れた位置に居る藤田に指示を出し、リーダー格の男達の対処に当たらせ、床に転がる二人の所に走る。

「おい、何やってんだ？」

そう言つと、男ね体を蹴り上げて彼女を救出する。

彼女は素早くその場を離れ、少年と壁際に引いた。

「何だ、デメエは？！」

向けられた銃を蹴り飛ばし、俺はそいつの眉間に銃口を当てる。

「大人しく金だけ持ってかえるなら、見逃してやろうと思っていたのによ。」

「ほう、そうなのか？」

不意に背後で、撃鐵の上がる音と共に男の声が聞こえた。

「くっ！」

新手か？

此方は3人、相手は4人、どうする？

その時、

「動かないで！」

彼女が叫ぶ。

少年を後ろに庇い、さっき俺が蹴り飛ばした銃を構えて、新手の男の背後から狙いを定めていた。

「ほう？」

新手の男は、銃を構えたまま振り返り、彼女に迫る。

まずい！彼女の元に向かおうとした俺を、大男が阻む。

「逃げろ！」

じりじりと追い詰める男の顔が月明かりに照らされる。

「叔父さん！」

「高明様！」

少年と彼女が叫ぶのは、同時だった。

藤田が睨んだ通り、内部に手引きする者が居たか。

「何故です？」しばらくの沈黙の後、銃を構えたまま彼女は問う。

「何故かだと？清志、強欲なお前の父親は、全てを自分の物にして、身内である俺でさえ切り捨てようとしたのだ。俺の事業も、お前の父親にことごとく邪魔をされてしまったのだよ。」

「でも！それでも、坊ちやまを誘拐していい理由にはなりません！」

「言っな、小娘。お前、あの家の使用人か。女の身で銃など、止めておけ。お前に扱える代物では無い。」

そう言つて、高明と呼ばれた人物が近づこうとした時

『ガン』

彼女の銃口が火を噴いた。

その場の全員が固まる。

高明の足下から煙が上がっていた。

「お前っ！」

明らかに焦りを表した高明に、彼女は目の前まで詰め寄り、銃口を胸に押し当てた。

「この距離なら、外しません。」

「くそっ！」

高明も彼女に銃を突き付けた。

「そこまでだ！高明さんよお、俺達はあるたのお兄さんから、犯人の詮索無用って言われて来てるんだ。あんたが此処で引くなら、俺達は何も無かった事に出来る。しかし、これ以上事を起こすなら、それ相応の覚悟をしてもらわなきゃならねえ。」

彼女と高明の対峙は続く。

「どうするよ、高明さん？」

不意にガツと音がして、彼女が崩れ落ちる。

高明が銃尻で、彼女のこめかみを殴りつけたのだ。

そして、

「お前達、引き上げるぞ！」

そう言くと、忌々しげに金も取らずに仲間を連れて引き上げてゆく。

「大丈夫か？嬢ちゃん？」

真吾が彼女を抱え起こす。

痛みと目眩で顔をしかめながら、彼女が最初に吐いた言葉は、

「坊ちゃまは？」

だった。

「大丈夫だ。緊張の為、気を失っているがな。」

清志を抱きかかえた藤田が答えると、彼女は安心した様に

「良かった…」

と呟いて笑った。

「全く無茶しやがって！殺されるかもしれないんだぞ！」
「でも、助けて下さったでしょう？」

「ぐっ！」

ちげーねえと笑う真吾を睨み付け、俺達も廃工場を後にした。

第1章 (2)

車に乗り込んだ俺達は、一路岩崎邸を目指す。

藤田は助手席に移り、後部座席には俺と疲れて寝てしまった清志、そして清志に膝枕をし、その髪を撫でる市村桜が残された。

「銃を…扱った事があるのか？」

「…昔。」

顔を上げず、小さな声で言葉少なに答える。

「何故か聞いてもいいか？」

「…絶対に守りたいものを、二度と失わない為に…。」

消え入りそうな声で呟く彼女の手に、ポタリと血が滴る。

気が付くと、彼女のこめかみからはかなりの血が流れ、服の襟や胸は血で濡れていた。

「これで、傷を押さえてる。」

俺は自分のハンカチを彼女に渡す。

「えっ、でも…」

「いいから、お前のは、そいつに使ったんだろうが。」

彼女のハンカチは、擦りむいた清志の足に巻いてある。

「すみません、お借りします。」

そう言くと、今度は素直に受け取り傷口に当てる。

みるみる赤いシミが広がるところを見ると、まだ出血は続いている様だ。

「屋敷に着くにはしばらく掛かる。お前も休んでおけ。」

何も言わずに頷いた彼女は、しばらくすると静かな寝息をたてはじめた。

「もう少し、優しい物言いが出来ないもんかねえ？」

溜め息まじりに真吾がこちる。

「うるせえ…。」

そう言つと、俺は不安定な彼女の体を支えるために手をまわして肩を抱いた。

「それにしても、驚きましたね。」

「全くだ。見掛けによらないと言つか、普通の嬢ちゃんじゃ無いのは確かだわな。」

前の二人も、彼女が気に入った様だ。

見掛けよりもずっと苦労してきたんだろう。

この小さな肩に、一体何を背負つて来たのが、少し気になった。

岩崎邸に到着した時、車の音を聞きつけ家の者が大勢玄関先に集まつた。

子供の無事を喜び、金が無事な事にも大喜びだった。

岩崎氏は俺の手を握り締め

「本当に良くやってくれました！御礼は、また後日ということであつと、そそくさと邸の中に入つてしまふ。」

「ちよつと待ってくれよ、この子は怪我をしちまつてるんだ。おいっ！」

そういう真吾の言葉も無視され、玄関には誰も居なくなつてしまつた。

「なんだ、ありゃ？」

遠慮がちに俺達の後ろに立っていた彼女は、何も気にならない様になつてこり笑つと、

「本日は、坊ちやまをお助け頂き、本当にありがとうございました。それでは、私は失礼致します。」

と、俺達に向かつて一礼して屋敷に戻る。

「おい！お前！」

俺は、その背中に声を掛けた。

「お前、俺達の所に来る気はないか？」

彼女はゆつくりと振り返り、口元をほころばせて答える。

「…考えておきます。」

第2章 (1)

3日後、俺達は依頼料を受け取りに岩崎邸を訪れた。

岩崎氏は、先日の礼を長々と述べると、犯人の事は他言しないようにくどくどと語った。

「どうやら、息子が全て話したらしい。」

「その件に関しては、全て了解しております。決して他言は致しませんので、ご安心を。」

「こういう事務方の仕事は、藤田に任せていれば問題ない。」

「そういえば、あの嬢ちゃんの怪我は、大丈夫だったのかい？」

真吾が尋ねる。

「は？怪我ですか？誰がでしょう？」

「あの時、俺達と同行した…。」

「ああ、桜の事でしたか。あの者は、もう当家と関わりがありませんので…。」

「それまで黙って聞いていた俺は、この時ばかりは身を乗り出した。」

「どういう事だ？」

気色ばむ俺に拳をつかれ、岩崎氏はしどろもどろで話し出した。

「確かにあの娘は息子を救う為に頑張ってくれましたが、何でも銃を撃ったというじゃありませんか。しかも高明に対して…。」

「それは、あんたの弟が息子を誘拐したからだろう！」

真吾がむきになって反論する。

「それにしても、主人の弟にする態度ではありません。」

「だから、それは…。」

「それに銃ですよ！そんな危ない人間を、当家に置くわけにはいきませんし…。」

「…わかった、行くぞ。」

俺は、席を立った。

依頼料を受け取りながら、静かに藤田が言う。

「それでは今後共、巴探偵社を宜しくお願い致します。」

玄関を出ると、庭先から

「待って！」

と声が掛かる。

パタパタと走って来たのは、清志だった。

「あのね、さくらがね、さくらが居なくなっちゃったの！」

俺のズボンを握り締め、見上げる清志の目が潤む。

「坊ちやま……」

追いかけて来た子守メイドに、俺達は話を聞いた。

「確かに高明様に銃を向けたっていうのもあるんですが、旦那様はあの夜、桜さん呼び出して、それで……」

「！」

「で、どうやら拒まれたそうなんですけど、その時に桜さん、自分に手を掛けるなら自害するって、割れた硝子で自分の事刺そうとしたみたいで……」

「なんでえ、それ……。てめえの息子を命掛けて助けた者への、それが仕打ちかよっ！」

「確かに、酷いな……」

「それに、多分彼女は……」

「他にも何か？」

「あ……いえ……特には……」

と、齒切れが悪い。

「彼女が出て行ったのは、いつです？」

「昨日です。皆に挨拶をして、夕方に。」

「彼女の行き先に、心当たりは無いか？」

「さあ、彼女身内も居ないって、天涯孤独って言うてたし……お花見する位しか出掛けなかったし。」

「花見？」

「そう、彼女名前が桜だから桜の花が好きだつて。でも、一緒に花見した時、あまり楽しそうじゃなかったな……なんか、悲しそう……。それじゃ、わたしそろそろ……。」

そう言うのと、メイドは屋敷の庭に戻って行った。

「どうする、トシ？お前、彼女を引き抜くつもりだったんじゃないのか？」

「まあ……しかし、居なくなっちゃったんなら、しょうがねえな。」

「そんな状況で辞めたのであれば、次への紹介状は書いて貰えなかったと考えるべきでしょうね。」

「そうだな。」

「俺は、家政婦紹介所を当たってみます。」

「おつ、それじゃ、俺も一緒に回るわ。一人より効率いいだろ？」

「おい、何もそこまで……。」

「何言つてんだよ。あんなに女を雇うのを嫌がってたお前が、食指を動かす女が居るなら、何が何でも探さねえとな！」

「人を探すのも、探偵の職務です。」

「じゃあな！所長さんは、自力で帰れ！」

そう言うのと、二人は車で走り去った。

何を熱くなってるんだ！まったく……。

しかし、可哀想に彼女は散々な目に遭ったらしい。

だいたい、彼女が銃を持ったきっかけは、俺を助ける為じゃ無かったか？

「くそつ、礼も言えてねえじゃねえか。」

大通りで乗合タクシーに乗り、上野の事務所を目指す。

ふと思い付いて、上野山に行き先を変更した。

古くから花見の名所だが、今が盛りの桜を見ようと、大勢の花見客で賑わっていた。

いくら桜が好きだからといって、こんな状況の時に花見は無いか？
そう思いつつ、人波の中に彼女の姿を探す。

陽が陰り出すと人もまばらになり、半ば諦めかけた時、大きな桜の
古木の下に布を敷き、座っている和装の彼女を見つけた。

「おい。」

俺が声を掛けると、彼女は驚いた様に目を丸くし、そしてにっこりと微笑んだ。

「まあ、こんばんは。奇遇ですね！貴方もお花見ですか？」

「まあな…ここ、いいか？」

「ええ、どうぞ。」

俺は彼女の隣に腰を下ろし、何と続けようかと迷う。

「和装なんで、見間違いかと思った。」

「外出用の洋服は、汚してしまったので…。」

彼女は、そう恥ずかしそうに俯いた。

「桜が好きなのか？」

「ええ、とても…。」

遠くを見ながら微笑む。

「傷は…。」

そう言つて彼女のこめかみを触ると、

「…つつ！」

と、小さく叫ぶ。まだ傷は癒えていない様だ。

「すまん。医者には診せたのか？」

彼女は、被りを振る。

「大丈夫です。それに、そんな暇無かつたし…。」

「あれだけ出血してたんだ、医者には診せた方がいい。」

「そうですね…。」

彼女の首筋には、新しい傷口が増え、手にも白い包帯が痛々しい。

「岩崎の屋敷を、出たんだってな。」

少し驚いたような顔をして、すぐはにかむ様な笑顔を作る。

「ご存知だったんですか？行かれたのですね、お屋敷に。」

「清志が、寂しがっていたぞ。」

「そうですか…でも、いずれあそこもお暇しようと思っていたんです。」

また、沈黙。

春の夜風が心地良い。

「夕べは、どうしていたんだ？」

小さな溜め息をついて、少しちやかす様に

「歩いてましたよ。」

と、笑う。

「一晩中？」

「…春のお月様が、綺麗でしたからね…。」

「これから、どうする？」

それには答えず、彼女は俺の肩に頭をもたげる。

「…少しだけ…、少しだけ、こうしててもいいですか？」

「ああ。」

彼女が少し震えているのがわかる。

声を殺して泣いている。

屋敷勤めは、主によつては理不尽な事も多いと聞く。

抱き締めてやりたくなる衝動に駆られるが、彼女はそれを望んでいいのか？

俺の頭の中で色々な葛藤をしている内に、彼女のバランスが崩れ、前のめりに倒れる。

「おい、大丈夫かっ?!」

「…はい…。」

彼女の額に手をやると、火の様に熱い。

「お前、熱があるじゃねえか！」

「…大丈夫…です。」

「大丈夫じゃねえ！ちよつと待ってる！」

俺は、麓の人力を呼ぶと、彼女を事務所まで連れ帰った。

いきなり女を抱えて帰って来た俺を見て、皆が一樣に仰天したが、俺の唯ならぬ様子と彼女を見て、慌てて行動を起こす。

「藤田、高柳先生を呼んで来てくれ。」

「了解しました！」

「キヨ、彼女を着替えさせてくれ。」

「わかりました。」

「トシ、俺は何をすればいい？」

「おまえは、氷屋の親父に店開けさせて、氷買ってきて来い！彼女凄いい熱出しちまってる。」

「あいよ！任しとけ！」

それぞれがバタバタと動き、1時間後には無事に往診して貰う事が出来た。

「先生、容態は？」

「かなり疲労が溜まっているのも有るが、あの頭の傷がなあ…それに、肋骨にもヒビがいつてそうだ。体のあちこちに真新しい打撲痕があつてな…あれは縛られて、しこたま殴られたって感じだぞ。彼女、一体何があつたのかね？」

「まあ、色々な…。」

俺の手は、血が滲む程強く握られた。

「暫くは、絶対安静だ。もしも吐く様なら、すぐに連絡をよこしなさい。薬を用意しておくから、後で取りに来るといい。まずは、熱を下げて、意識を取り戻さなければな…。」

「ありがとうございます。」俺は、先生に深々と頭を下げた。

「藤田、すまねえが、先生送りがてら、薬貰って来てくれるか？」

「承知しました。」

第2章 (2)

藤田が高柳先生を送りに出ると、俺はソファ―に身を沈めた。

「酷い話だ、あのヒヒ親父、とんだサド野郎じゃねえか！」

真吾が上目使いに、こつちを睨む。

「あの家じゃ、語られぬ秘密ってヤツなんだろうよ。子守が言ってただろ。」

「で、トシ。彼女に話したのか？」

「何を？」

「ここで、雇いたいって事だよ！」

「…まだだ。」

「何だよ、じゃあ何話してたんだよ！」

「だからっ…その事を話す前に、彼女倒れちまったんだろっがっ！」
そう言つとソファ―を蹴つて、俺は階段を駆け上がった。

彼女は、2階の客間に床を取らせてある。

「キヨ、入るぞ。」

そう言つと、部屋に踏み入る。

キヨは、ベッドの横に座り、彼女の布団を直してやっていた。

キヨの目が赤い。

「どうした？キヨ？」

「キヨは、こんな痛々しい傷は、初めてでございます。お医者様の言つには、表から見えない所だけを、何か道具でぶつんだとか。それは酷い痣と傷が体中に…。」

そう言つて、また涙ぐむ。

「…う…ん…」

彼女は呻き、仕切りに手を動かす。

「はいはい、此处に有りますよ。」

そう言つてキヨが彼女に握らせたのは、懐中時計だった。

舶来物の様で、かなり年代物だ。

彼女は時計を握らせると、安心した様に穏やかな顔になる。

「手元に無いと、無意識に探すんですよ。余程大事な品なんでしょうねえ。」

「キヨ、夜は俺が付いているから、キヨは休め。」

「でも、坊ちゃま……」

「キヨには、俺達の世話もある。どうしても手の入る時には、助けてくれ。」

「わかりました。何時でもお声を掛けて下さいまし。」

「ああ、ありがとう、キヨ。」

ベッドの横に置いた椅子に腰を掛け、彼女の顔を覗き込んだ。

先日の勇ましい彼女、上野で声を殺して泣いていた彼女、今熱にかかされている彼女。

全部同じ女なのに……。不思議な奴だ。

「……」

熱にうなされた彼女が寝返りをうち、その拍子に懷中時計がベッドから滑り落ちる。

それを拾った途端、

「……くっ！」

俺は、激しい目眩を覚え、時計を持ったままベッドに突っ伏した。

此処はどこだ？

夜の街、古めかしい町屋を、俺は走っている。

仲間と誰かを追っている。

相手は、数人の侍。

板土塀まで追い込むと、相手はこちらに向き直り、刀を抜いて切りかかって来た。

俺は……俺達は、負ける気がしない。

あっという間に抜刀し、奴等を片付けしまった。
ひっ捕らえた者もいる。

そいつ等を連れて、意気揚々と仲間の待つ館に帰る。

自室に戻ると、障子が開いて彼女が茶を持って入って来た。
今日も和装なんだな。

袴姿も、凛々しくていいもんだ。

彼女は、茶を差し出し、一生懸命何かを話している。

俺は、それを聞きながら、茶を啜る。

美味い。その味に、ホツとする。

その時、誰かが障子の向こうから声を掛けた。

「……さん」

「西園寺さん！」

肩を揺すられ、飛び起きた。

夢か…？

藤田に、心配そうに覗き込まれていた。

「大丈夫ですか？」

「ああ、うつらうつらしていたらしい。」

「薬を貰って来ました。今晚は、俺が変わりましょうか？」

「いや、いい。大丈夫だ。」

藤田はそれ以上何も言わず、彼女の薬と、キヨが俺の為に作った握り飯を置いていった。

俺の手の中には、まだ彼女の懷中時計が握られていた。

すっかりとした鎖が付いたその時計は、明らかに男物だった。唐草

模様の表面に無数の傷が付き、本体の一部はへこんでいる。

竜頭の先に付いているボタンを押すと、蓋が跳ね上がった。

しかし、文字版の硝子にはヒビがはいり、針も少し錆び付いている。

竜頭をまわしても全く手応えがなく、針も動こうとしなかった。

「壊れちまつてるのか…。」

そう呟いた時、ふと視線を感じた。

彼女の目が開いている。

「おい、大丈夫か？」

そう問うても、視線がはつきり定まらない。

ただ、時計を持った俺を見て、嬉しそうに微笑む。

「あ、すまない。見せて貰っていた。」

そう言つて時計を握らせると、彼女は愛おしそうに胸の上で時計を握り締めると、また微睡みの世界に落ちて行つた。

父親の形見か何かか？

何れにしても、彼女にとっては、大切な御守りの様なものなのだろう。

一週間すると、彼女はベッドの上に起き上がる事が出来る様になつた。

「本当に、お世話をお掛けしてしまい、申し訳ありません。何とお礼を申し上げてよいか……」

「いや……」

話したい事があると言われ部屋に来てみれば、以前の彼女に戻つて安心する一方で、他人行儀な彼女に何となく居心地が悪い。

「明日にでも、お暇しようと思つております。」

「……」

「掛かった治療費は、働いてきちんとお返し致しますので。」

「……なあ。」

「はい？」

「此処を出て、どこか行く当てがあるのか？」

「……いえ。でも、大丈夫です。今迄もそうして来ましたが、何とかなります。」

そう言つと、にっこりと笑う。

「それで、またあんな事をされる様な屋敷勤めをするのか？」

少し視線を落とし、身を固くしたまま彼女は言つた。

「それでも、私の様に身寄りの無い者には、人間らしい扱いをして

頂ける、良い奉公先だったんですよ…。寝る場所と着る物と食事が与えられ、少しでしたがお給金も頂けて…。」

「だから、折檻されてもいいっていつのか！」

俺は、だんだん腹が立って来た。無意識に立ち上がって話し始める。

「…あれは…。私が、旦那様を拒んだから…。」

「屋敷内でも、よくある事なのか？」

「可哀想な方々なんです。人を愛する意味を、ご存知無い…。」

「お前、何があっただんだ？」

「はい？」

「あんな扱いされて、許す事が出来るっていつのか？」

彼女は、なにも答えない。

俺の胸がざわめいた。

屋敷勤めをしていれば、きつとこんな事は、よくある事なのだろう。

なのに、無性に腹が立つ。

「犬猫の様にぶん殴られ、それでも許すって、お前には人としての誇りは無いのか?!」

「…あります。」

「何故逃げ出さなかったんだ？お前自身を何故大切にしない！」

「……。大切にした結果が、これなんです。」

ガツンと頭を殴られた様な気がした。

そうだ、彼女は女としての誇りを守ったのだった。

軽い頭痛を覚えて、椅子に座る。

「…すまない。」

「いえ、何も西園寺さんに謝って頂かなくても…。」
と、彼女は恐縮する。

「いや、そうじゃ無くて…お前に銃を握らせたのは、俺の責任だ。」

「いえ…、そんな…。」

「いや、あれは俺の判断ミスだ。結果的に、それがお前の仕事を奪

い、折檻される目にもあわせちゃった。だが、俺の命を救って貰った事に感謝する。」

「あの時は夢中で…自分でも驚いています。」

それに、西園寺さんは私を助けて下さいました。ありがとうございました。」

沈黙が怖くて、俺は窓を開けた。

すっかり暖かくなった風が入り込む。

「此処にいる。」

「…えっ？」

「前に言っただろう。お前さえ良かったら、ここで雇ってやる。」

「西園寺さん…。」

「俺達は、男3人で探偵社をやってる。だが、この間の様に、どうしても女手の必要な時がある。そんな時に手伝ってくれりゃあいい。」

「…。」

「普段は、キヨを手伝って、家の事を頼む。キヨも歳なんで、なかなか大変なんだ。」

「…。」

「此処は部屋が余ってるから、住むのも問題無い。勿論、食事は皆で食う。」

「…。」

「あ、給金はそんなに期待しないでくれ。交渉なら藤田に…」

「あの…。」

「何だ？まだ何かあるのか？」

「本当に、私で宜しいのですか？」

「当たり前だ。だから誘っている。真吾も藤田も、お前を認めているし。」

「…わかりました。お世話になります。」

彼女は、深々と礼をした。

ホッとした俺は、最後に彼女に尋ねた。

「お前に取って、一番大切な物って何だ？」

「…命と、誠の心です。」

彼女の真っ直ぐな瞳が、俺を射る。

「それじゃ…」

俺は、彼女の顎を持ち上げて、再び自分の瞳と合わせる様に話す。

「所長としての命令だ。自分の命も大切にしろ。仕事開始は、もう少し体力が戻ってからだ。いいな？」

「はい。」

彼女の瞳の奥が輝いた気がした。

が、そこでまた目眩が？

デジャヴ？

以前にも、同じ様な事があった？

バランスを崩した俺は、彼女に抱きかかえられる形になる。

「大丈夫ですか？西園寺さん！」

彼女の肩に頭を預けたまま、俺は聞いた。

「…なあ、お前と以前何処かで会った事…あったか？」

「…さあ…どうでしょう？」

窓からふく風は、春から初夏に移る香りをはらんでいた。

第3章（1）

彼女を雇う事が決まり、皆は一樣に喜んだが、中でもキヨの喜びは尋常では無かった。

彼女の看病をする内に、すっかり打ち解け、同じ職場の仲間が出来るというより、娘が出来た様なはしゃぎ様だ。

数日後、彼女は家事が出来る迄に回復し、俺達も日常の生活が戻っていた。

「坊ちやま、今日は桜さんと買い物に出ますが、宜しゅうございますか？」

キヨが、いそいそと聞く。

「ああ、別に構わないが。」

「キヨさん、何買いに行くんだい？」

「桜さんの着る物ですよ。」

「キヨさん、私は別に……。」

「何言ってるんです！若い娘が、着の身着のままで言い訳ありませんよ！」

確かに、あれから彼女は、此処に來た時の着物しか着ていない。

後は、浴衣と洋服が一着。

その洋服も、先日の怪我で付いた血が落ちず、とても着れないとキヨがボヤいていた。

「ああ、構わない。一通り用意してやってくれ。」

「あ、俺はあのメイドの格好がいいな。」

真吾が、ソファで寛ぎながら笑う。

「事務所でメイド姿というのは、そぐわないのではないか？」

「えー、そうかあ？可愛いと思うぞ。」

藤田と真吾の様子を笑いながら見ていた彼女は、俺に向き直り聞いた。

「所長は、どう思われますか？」

俺は…

「……袴。」

「えっ？」

「あ、いや…お前の好きにするといい。」

「はい。」

女達が出掛けると、事務所がガランとする。

「やっぱり良いよなあ、若い娘が居るってというのは。」

「確かに、事務所も清潔になったしな。」

真吾が手をヒラヒラさせて

「違う違う藤田、空気がだよ！空気が華やぐって！」

「それでは、今度こそ愛想を尽かして出て行かれぬ様に、十分注意する事だな。」

「てめえ、俺だけの責任かよ！」

そう言うと、真吾は藤田に掴み掛かる。

「止めておけ、埃が立つ。どうしてもというなら、相手をするが…。」

「

我が事務所に女中が長居しない最大の原因は、血の気の多い男が3人居るとい事にある。

拳を交えるのは、意志の疎通を図らんが為という様な具合だから、キヨの様に幼い頃から見ている者以外は、大概色を失い恐れおののく。

今回は、珍しく真吾が引き、憮然とソファーに身を沈める。

「それにしても、トシ。あれはねえだろ。」

「何だ？」

「袴だよ。袴。」

「それは、俺も思いました。所長にしては、珍しいと。」

「ああ…。」

煙草に火を付け、ゆっくりと煙を吐く。

何故あんな事を言ったのか、俺自身信じられなかった。

ただ、何となく彼女の立ち働く姿に、袴がしっくり来る様な気がして…彼女の袴姿など見たことも無いのに？

最近の俺は、どうかしている…。

「トシ？どうした？」

「ああ、少し疲れているのかもしれない…。」

「おお、休め休め！そんでもって、桜に看病してもらえ。」

真吾は、ニヤニヤしてして俺を見る。

「…うるせえ。」

そう言いながら、俺は忙しく煙を吐き出した。

夕方、買い物を済ませて帰って来ても、キヨの興奮は続いていた。彼女の着物や洋服は、殆どキヨが見立てたらしい。

皆で夕食を食べながら、買い物談義に花が咲く。

「それで、自分で選んだ物は、無かったのか、桜？」

「それなんですよ、真吾坊ちゃま。桜さんったら、袴だけ。」

俺達の箸が、一斉に止まる。

「しかも、男袴なんですから。」

「あれは、武道の稽古用です。」

「何か、武道を修練していたのか？」

「ええ。昔、小太刀を…。」

「今時珍しいな。でも、小太刀なんか荷物にあつたか？」

「ある方にお預けしてあるので、近々行って稽古も付けて頂くと思っています。」

「そうか、そんな知り合いがいたのか。」

「はい。古くからの知り合いです。」

「それにしても、今日桜さんが色んなお召しを着ているのを見ていたら、キヨは懐かしい人を思い出しましたよ。」

キヨは、遠い眼差しで回想する。

「坊ちやま、覚えていませんか？昔、西園寺の伊豆の別邸で働いていた…名前を、何と言ったでしょうねえ？」

ガチャンと、彼女が湯飲みを倒す。

「あ、済みません！」

慌てて拭く彼女を見て、キヨが笑う。

「そんな所も、そっくりでしたねえ。」

「よく有る顔だからですよ。」

彼女は笑って答えたが、俺と真吾は同じ事を考えているのがお互いにわかった。

伊豆の別邸…子供の頃、よく行った。

数人いた女中の中で、年若い姉やがよく面倒を見てくれた。

その姉やの顔…。

「そうなのかしらねえ？御親戚では無い？」

「違うと思います。」

「そう…。じゃあ他人の空似ね。そういえば、その子にも、同じ様な話をした事がありましたねえ。キヨがまだ西園寺にお仕えする前、京都で攘夷派の浪士に絡まれている所を助けて貰った時に居た娘さんに似ていてねえ…。」

「キヨさん、それはとんでもなく古い話だなあ。」

「いえね。その時助けて頂いた方々の中に、素敵な方がいらして…。キヨの初恋でございました。」

今度は、藤田がじつと手を止めてキヨの話を聞いている。

「痛っ。」

割れた湯飲みを片付けていた彼女が、指を切ったらしい。

「消毒した方がいいだろう。こちらへ…。」

藤田が席を立ち、事務所に向かう。

彼女は戸惑いながら、藤田の後を着いて行った。

第3章(2)

事務所の薬箱を開けながら、俺は頭の中を素早く回転させていた。市村が事務所に入って来て、俺の向かいに座る。

「手を出せ。」

おずおずと出す手を取る。

脈が早く、掌にはジツトリと汗をかいている。傷を消毒しながら、目線を上げずに話す。

「市村、今度少し時間を作って貰えるか？」

「私も、藤田さんにお願ひがあります。」

「何だ？」

「お父様に、ご連絡を取って頂けませんか？」

「?!」

「市村が、是非稽古をつけて頂きたいと。」

「先程の話、我が父の事だったのか？」

「はい。」

「それでは、その折に、俺の質問にも答えて貰いたい。」

「何でしょう？」

「…魔女について。」

「……わかりました。」

数日後、俺は出掛ける用事がてら、彼女を小太刀の稽古に送ると所長に話し、車で実家に向かう。

「ただいま戻りました。」

「お帰りなさい、剛さん。市村さん、いらつしやい。」

母が、俺達を迎える。

「ご無沙汰致しております、時尾様。」

「さあ、どうぞ…。先にお着替えになる？あの方は、道場で待っているから。」

「はい。」

そう言うと、別室に彼女を通した。

「母上も、彼女をよくご存知なのですか？」

「以前、2度程お見えになった事が有るのですよ。」

「彼女は、一体…。」

母は、眉根をよせて静かに言った。

「それは、ご本人と父上にお聞きなさい。」

「失礼します。」

袴に着替えた彼女は、髪を高く結びつけ、凜とした佇まいになった。俺は、彼女を道場に連れて行く。

「失礼します。父上、市村桜さんをお連れしました。」

道場上座に座った父の向かいに、市村は進み出て手を付いた。

「ご無沙汰致しております。斉藤さん。」

「…その名前で呼ばれるのは、久し振りだ。変わり無い様だな、市村。」

その遣り取りを聞いて、予想はしていたものの大きな衝撃が走る。

俺の父は、以前警官隊に居たが、それ以前幕末には新撰組隊士として名を馳せていた。

三番隊組長といえば、居合いの達人、維新の志士を大勢手に掛けたが、鳥羽伏見の戦いで会津に組みし、官軍に敗れた後は会津藩お預かりとなった身だ。

斉藤一という名前は、新撰組に居た時に父が使っていた名前。その名前を、市村は言った。

今から50年近く前の筈。

「今日は、お預かり頂いていた小太刀を、お返し頂きたく参りました。」

「稽古も所望だったな。」

「はい、お願い致します。」

父は、用意していた小太刀を市村の前に置く。

市村は、それを腰に差し、スラリと抜くと父と対峙した。

掛け声と共に、市村は父に向かう。

キンツという金属音が何度か交わされ、父が市村を力で跳ね飛ばした。

息と体制を整える市村に対し、父は刀を鞘に収め、低い体勢を取る。あの構えは！

間合いを見ていた市村は、再び掛け声と共に突っ込む。

銀色の光が弧を描き、ギンツ！という音と共に市村の小太刀が吹っ飛び、彼女の喉元に刀が掛かる。

新撰組三番隊組長、斉藤一の抜刀術。

未だ衰えを知らぬその技に、俺の背中汗で濡れる。まるで、自分が対峙している様だ。

父は刀を収め、市村も飛ばされた刀を収めて座る。

「ありがとうございました。」

「いい立ち会いだった。」

「斉藤さん、私の腕は……。」

「心配するな。相変わらず、曇りの無い剣だ。」

「良かった。しばらく手にしていなかったので、不安だったんです。」

「そう言うと、汗を拭い彼女は笑う。」

いつも事務所で見せるのとは違う、少女の様なその笑顔に、俺は見取れていた。

「その小太刀を手にとると言う事は、現れたという事か？」

「はい。実際に小太刀を使う事にはならないと思いますが、この小太刀も又、私の心の支えですから。」

「そうか…。市村、剛と同じ所に居るのだと聞いたが。」

「はい。藤田さんには、お世話になっております。」

父は、俺の方に視線を移すと、

「剛、立ち会いなさい。市村、見取り稽古をするといい。まだ、腕が痺れるだろう。」

「ありがとうございます。」

それからしばらく、俺は久々に父と立ち会った。

幼い頃から稽古を付けて貰っていたとはいえ、この人の剣には到底及ぶものではない。

父の剣は、竹刀よりも真剣、実戦で力を発揮する。

それを、いきなり真剣で立ち会いだと？

有り得ない…。

「今日は、お前の方が心に乱れがある様だな。」

「申し訳ありません…。」

父は、小太刀用の竹刀を持って来ると、市村の前に置いた。

「普段の稽古は、剛に付けてもらうといい。真剣と言う訳にも、いかないだろっからな。これを持って行け。」

「ありがとうございます。」

稽古が終わり、彼女が着替えている間、俺は父に問いただした。

「父上、彼女は一体…。」

父は、腕を組み静かに目を閉じて言った。

「…お前も、先程の会話を聞いて、薄々は理解出来たのではないのか？」

「しかし、いくら何でも…。」

「彼女に…話を聞くのか？」

「市村は、答えてくれると言いました。」

「…そうか…」

深いため息を吐くと、居住まいを正し、父は言った。

「話を聞くのは構わん。ただ、他言無用だ。お前の仲間にもだ。彼女は、紛れもなく誠の旗を掲げた、新撰組の隊士だ。その秘密を他言するとなれば、私が容赦はしない。」

そして、いきなり抜刀すると、切っ先を俺の喉元に当てたまま言った。

「彼女には、果たす事がある。その思いだけで、今迄生きてきた。本当に、斬り殺される様な威嚇に、俺のこめかみから汗が流れ落ちる。」

「…。」

やがて刀を収めると、

「剛、市村を守ってやれ。絶対に死なせるな。」
と言った。

後ろで扉を開ける音がする。

「剛さん、市村さんがお待ちですよ。」

と、母が声を掛ける。

父に一礼すると、母と共に道場を出た。

「…殺されかねない威嚇でしたわね。」

「見ておられたのですか？」

「市村さんの事になると、未だに血が湧くのでしょうか。」

「どういう事です？」

「父上の、昔の想い人ですよ。多分、間違いありません。」

そう言うと、母はコロコロと笑った。

「では、昔の恋人…？」

「いいえ、父上の片思いでしょう。市村さんは、気付いてらっしゃらないから、剛さんもそのつもりでね…。」

「…。」

今日は、とんでも無い事を、山の様に知ってしまう日になるらしい。

座敷には、市村が静か座り、俺を待っていた。

「待たせて済まない。」

「いえ。」

母が座を外すと、俺は口火を切った。

「俺が、父の息子だと、いつ気が付いた？」

「初めから、お名前も存じておりましたし、お父上の若い頃に瓜二つでしたので……」

「……」

「それに以前、此方にお伺いした時に、お会いしました。お忘れだ
と思いますか……」

「いや……」

俺には、臆気ながら記憶があった。

彼女がまだ寝込んでいた頃、持っていた懐中時計を見て、幼い日の
記憶が蘇った。

家に来宅した女性に、庭で遊んで貰った記憶。

彼女の懐から取り出した時計を見せて貰った俺は、粗相をして落
してしまった。

落ちた拍子に蓋が開き、文字盤の硝子にヒビが入っている事に驚き
青くなった。

父や母の怒り声が響く中、彼女はふわりと俺を抱き寄せたまま優し
く言った。

「驚きましたね坊ちゃん。大丈夫ですよ。この時計は、元々壊れて
いるんです。」

「本当に？」

「はい。だから、気にしないで下さい。」

子供ながらにその優しさが嬉しくて、自分から抱き付いた。

顔は、はっきり覚えていない…だが、母とは違う、いい匂いがした…。

「藤田さん？」「いや…、先日言った、魔女の話だが。知っているのか？」

「はい。」

『魔女伝説』誠しやかに流れるその話は、どこからともなく上流階級の中で広まっている都市伝説。

この世には、永遠に歳を取らない美女が居る。

夜な夜な人の生き血を啜り、変わらぬ美貌を保ち続けている…という吸血鬼の話だ。

「あの魔女とは、お前の事か？」

「噂の元は、私かもしれません。かなり脚色されていますが…。」

そう言うと、クスクスと笑った。

「吸血鬼というのも？」

「脚色ですよ。」

「何時からだ？歳を取ることが無くなったのは。」

「多分…明治の御代になって、直ぐ位だと思います。」

「何故だ？どうして…。」

「わかりません。」

「！？」

「私にも、解らないのです。」

「…。」

「年を取らないというのは、やはり気味が悪いですからね。奉公先も3年から5年で変わらないといけませんでした。何十年も空けて同じお屋敷に勤める事もありましたが…それにしても、先日のキヨさんには参りました。」

と、子供の様に笑った。

「西園寺の伊豆の別邸というのに居たのも、お前なのか？」

「そうです。」

「所長や真吾とも、会った事があるんだな？」

「ええ、可愛かったですよ、お二人共。」

俺は顔をしかめて、こめかみを揉んだ。

父上、もしかしたらバレるのは時間の問題かもしれませんが…。「誰か、人を探していたのか？」

「…はい。」

「…敵か何か、いわくのある人物なのか？」

「…。」

「俺は先程父より、お前を守る様に言われた。絶対に死なせてはならぬと。」

「…。」

「相手は誰だ？誰から、お前を守ればいい？」

「…。」

「市村！！」

「…ご勘弁下さい。そればかりは…。」

そう言つて、彼女は深々と頭を垂れた。

第3章(3)

彼女の体からは、何者をも拒絶する雰囲気が漂う。

これ以上は、無理か。

「…帰るぞ、市村。」

「はい。」

俺達は、実家を出た。

帰る車の中の重い沈黙が耐えきれず、俺は彼女に話し掛ける。

「お前の小太刀の腕、なかなかのものだった。」

「ありがとうございます。」

「しかし、驚いたぞ。父を相手に、いきなり真剣で挑むとは…。」

「斉藤さんとは、真剣でしか手合わせして頂いた事が無いんです。」
なる程、それが普通の事だったという事か。

「その…新撰組での父は、どういう人物だった？」

「…強かったですよ。とても。抜刀術では、沖田さんも適いませんでした。新月の闇を切り裂く様な…そんな剣でした。お父様から、お聞きにはならないのですか？」

「あの通り寡黙な人でな…あの頃の事は、特に何も話さない。今日程雄弁な父を見たのは、初めてかもしれん。」

「昔から寡黙な方でしたから…。真面目で、努力家で誰よりも忠実で…でも、優しくて面倒味が良い方でしたよ。」

「父がか!？」

「ええ、いつもさり気なく気を配る方で、斉藤さんには隠し事出来なくて。」

母の言葉が蘇る。

父は、昔から彼女を見守っていたのだろうか？

「…よく、似ていらっしやいます。藤田さんに…。」

運転を理由に前を向き、顔が紅潮するのを隠す。

「もう直ぐ、着くぞ。」

街が茜色に染まるのが美しいと、素直に思った。

第4章（1）

梅雨明け間近と思われる、ある日の午後。

明け方に降った雨が上がると、久々の太陽が照りつけ、暑さと湿度で俺の機嫌は滅法悪い。

庭では、竹刀の音が響く。

小太刀の稽古から帰った日以来、彼女は時間があると藤田と練習をする事が増えた。

あの日も、藤田と一緒に帰って来て、それから何となく藤田が彼女を気遣っているのが分かる。

そして、彼女も…。

以前の屋敷勤めの時の様な硬さが少し取れ、年相応の明るさも出て来た。

いい事じゃねえか…。

なのに、何を苛つく事がある？

この、蒸し暑さのせいだ…くそつたれめっ！

「あー、あつちい！この暑い中、桜の奴元気だわ。俺と藤田、二人を相手するんだぜ。」

暑苦しい奴が、事務所に戻って来た。

「どこで剣なんか振るうつもりなんだか…、返って危なくて連れて歩けねえよ。」

「実際に振るうつもりは、ないんだろっよ。本人も、精神修行って言ってるしな。」

「精神修行ねえ…。」

「トシ、いやに批判的じゃねえか？」

「そんな事は、ねえよ…。」

「俺も、立ち会ってみて驚いたぜ。なかなかもんだ。お前も、一度試してみればいい。」

「お前の喧嘩剣法なんて、練習には成らんだろう。…まあ、その内な。」

その時、ベルの音と共に表のドアが開いて、汗だくの男が入ってきた。

「暑いなあ、今日は！よう、お二人さん！」

「橘警部、久し振りじゃないですか。」

この人は、警視庁の橘警部。

俺達の仕事を助けたり、助けられたり、良い関係が続けている。

「今日は、どうしたんです？」

「実は、助けて欲しい事があつてね。」

「それは、正式な捜査協力依頼ですか？」

「…そうだ。」

「わかりました。おい真吾、藤田を呼んで来てくれ。」

「申し訳無いが、あのお嬢さんにも頼みたいのだが…。」

「…女手が必要な仕事って事か。」

「そうだ。」

「わかった。少し時間をやってくれるか？今、外で稽古中なんだ。用意をさせて来る。」

話しを聞いた真吾が、二人を呼びに行く。

「お嬢さん、桜さんと言ったか、すっかり此処に馴染んだ様じゃないか。」

「お陰さんでな。」

「藤田君と稽古って、何か…。」

「ああ…、小太刀を習っていたそうなんだ…。」
嫌な予感がした。

「ほう、武道の嗜みがあるのか。そりゃあ、いい。」

「橘さん、彼女には…。」

そう言おうとしたのと、橘警部の言葉が重なる。

「今回は、彼女の協力が不可欠なんだよ。色々、複雑でな…。」

しばらくして全員が揃った所で、橘警部は話を始めた。

「西園寺君、元駐清国特命全権公使だった大鳥男爵とは面識があるかね？」

「一応は。以前元老院議員も務めていた人だろ？」

「彼の御子息とは？」

「いや、無い。というか…。」

「2人おられたのだから、亡くなられた。」

「…。」

「2人共に、それぞれ1人ずつ子供がおつてな。長男の御子息が、稔君5歳。次男の御子息が瑠嘉君12歳。この子供達が、何者かに毒を盛られた。」

「！」

「まあ、大事には至らなかったのだが、屋敷内での事だし、相手は男爵家だ。大っぴらに捜査も出来ん。というか、捜査自体許して貰えん。」

「成る程、さりとて繰り返されるかもしれない犯罪を、放つておけない、と…。」

「今回は、関門が多くてな…。」

「？」

「まず、男爵から攻略せんと、家の者に接触も出来ん。然も、屋敷内という、閉鎖空間での事件だ。」

「潜入捜査という事か。」

「どうだろうか？」

そう言つて、橘警部は彼女を見た。

成る程、以前屋敷奉公していた彼女には、打って付けだ。しかし…。

「君の名前を出したのは、男爵の方からなんだ。」

「何故だ？」

「…次男の御子息の瑠嘉君は、西洋人との間に出来た子供らしい。」

「…そういう事か。」

俺は、事務所の面々を見る。

皆が、一応に頷く。

「わかった。この依頼、受けさせて貰おう。」

俺の父親は、若い頃海外に留学していた。

そこで出会ったフランス女性と恋仲になり、俺が生まれた。

母親は、出産後すぐに亡くなったそうだ。

俺の家も爵位を持ったそこそこの家柄だが、流石に外国人との間に出来た子供を正式な跡取りとする事は出来ず、俺は今自由な生活をしている。

親子関係も、妹達との関係も、決して悪いものではないのは、一重に親父の仁徳だろうと感謝している。

だがこんな俺でも、若い頃はその境遇に悩み、色々と葛藤したものだ。

その武勇伝も、誠しやかに伝わっている。

孫の事を思いや

って、男爵は俺を名指しして来たんだろう。

俺達は、全員揃って小田原に向かっている。

男爵は今、本宅を出て、別荘に居るらしい。

別荘で男爵に面会を求めると、俺達は応接室に通された。

先年、大きな津波で全壊し、新築された別荘は、モダンな和洋折衷建築だ。

程なくして入って来た気難しそうな男爵に、我々は挨拶をする。

髭の立派な老人は、俺達を見て…正確には彼女を見て、明らかに狼狽した。

「きつ、君は…。」

少しはにかんだ様に笑う彼女は、

「…ご無沙汰致しております。御前。」

と言った。

知り合いか？と思った瞬間、男爵は彼女を抱き締めた。

呆気に取りられる俺達に向かい、

「君達、少し失礼するよ。」

そう言つと、彼女の腕を取り、退出してしまった。

「あ…何だ、ありゃ？」

「知り合いの様ですね。」

それから、小一時間は待たされただろうか？

「流石に、遅過ぎるんじゃないかねえか、トシ？妙な事になってるんじゃない。

…。」

「まさか、その様な事も無いかと…。」

「でも、いきなりの抱擁だぜ！ありゃあ、生き別れの娘か恋人にでも会つたつて感じだったしよ。」

俺は、心の中の不安を打ち消しながら、苛々していた。

「お待たせしたね。」

と部屋に入ってきた男爵に向かい、

「大鳥男爵、申し訳無いが、この依頼は受けかねる。失礼。」

そう言つと、

「来いっ！」

と彼女の手首を荒々しく掴んだ。

「待って下さい、所長！藤田さん、お願い…。」

そう叫ぶ彼女を、引き摺る様に退室した。

そのままずんずん駐車場まで来た所で、彼女は手を振り払う。

「どうされたんですか、所長！」

「どうしたも、こうしたも、ねえ！」

「落ち着いて下さい。依頼は、どうなさるんです！」

俺は振り返ると、彼女の両手首を掴み、彼女の背中を車のドアに力一杯押し付けた。

「…っ！しょ、所長？！」

「俺にはっ！依頼よりも大事な事がある！」

「…所長？」

そのまま、噛み付く様に彼女を睨み付けた。

「…何をしていた！」

「何って…お話ししていただけです。」

再び、力任せに彼女を押し付けて問う。

「本当だろうな！」

「古い、知り合いなんです。何年も連絡を取っていなかったの、それで…」

小さな声で、彼女は言った。

俺の口から、深い溜め息が出る。

力が抜け、支え切れずに、彼女にもたれる形になり、慌てて彼女が抱き止め、支えてくれる。

「…勘弁してくれ。寿命が縮まった…。」

「…私を…私の身を案じて下さったのですね？」

「…うるせえ…所長の務めだ。」

「嬉しいです。」

彼女の顔が、赤らむ。

「まずいな、依頼断っちゃった。」

「きつと大丈夫です。藤田さんが、何とかしてくれていると思います。」

俺は、彼女の頭をくしゃくしゃと撫でると、

「戻るぞ。」

と、再び別荘に入った。

「いやあ、西園寺君済まなかったねえ。」

俺達が応接室に入ると、男爵はわざわざ立ち上がって謝罪の言葉を述べてくれた。

「いえ。私の方こそ、失礼な態度を取ってしまい、申し訳ありませんでした。」

「いやいや、それも彼女を思ん図つての事だろう?」

再び全員が席に着くと、藤田が報告する。

「所長、大鳥邸潜入内偵の許可を頂きました。市村と私は使用人として。所長には、客人として大鳥邸に入って頂きます。真吾には、外との連絡、調査に当たらせてます。」

「わかった。」

「それでは、西園寺君。宜しく頼むよ。」

そう言つて立ち上がった男爵は、右手を差し出した。

「わかりました。宜しくお願い致します。」

そう言つて立ち上がって男爵の手を握った途端、俺の視界は暗転した。

「トシ!」

「西園寺君!」

皆の呼ぶ声が聞こえる。

「西園寺さん!!」

彼女が、泣きながら叫ぶ声が…。

泣くなよ、俺は大丈…夫…。

「こんな馬鹿騒ぎ、やってられるか!今は、こんな事してる場合じゃねえだろうがっ!」

「気持ちに分かるけど、もう少し上や周りも立ててくれないかな?」

雪道をズカズカ軍靴で踏みしめ、宿舎に帰ると荒々しくドアを開ける。

「お帰りなさい。」

そう言う彼女に一瞥して、俺は続いて入ってきた大鳥さんに言った。

「俺は、もう絶対に出ねえからな！」

「何かあつたんですか？」

「ああ、今日の祝賀会がお気に召さないんだよ、彼は。」

「ふんっ！俺は、其れよりも今遣らなきゃいけねえ事が…。」

大鳥さんは手を広げて首を振り、彼女はクツクツと笑いを噛み殺している。

「君が酒を飲めないのは、知っているけれどね。」

「大鳥さん、俺は飲めないんじゃない。飲まないんだ！」

「全く君は…。まあいい。その代わり、全ての戦いが終わったら、その時は僕と杯を酌み交わす約束をしてくれるかい？君とは一度、ゆっくりと飲みたいからね。」

「ああ、いいぜ。その時には、浴びる程飲んでやるよ…。」

月の明かりが眩しくて、目が覚めた。

何処だ、此処は…？

起き上がるとした時、ベッドの横に俺の手を握ったままうたた寝をしている彼女が居る事に気が付いた。

第4章(2)

俺は、自分が倒れた事を思い出した。
寝ている彼女の髪を撫でる。

心配させちまったな…。

小さなノックの音がして、灯りを持った男爵が顔を出した。

「起きていたのかね？」

彼女が寝ている事を気遣って、小さな声で囁く。

「少しいいかね？」

俺は頷いて、ベッドを出た。

そして、寝ている彼女を抱え上げ、今迄自分が寝ていたベッドに寝かせ、布団を掛けてやる。

男爵は、何も言わずに灯りを持って待っていた。

自室に招かれた俺は、男爵に失態の謝罪と礼を述べた。

「医者が、熱中症だと言っておったよ。昨日は暑かったし、君を興奮させてしまったからね。」

「ウチの者達は？」

「藤田君と川崎君は、帰ったよ。」

その後、再び藤田と話し合い、明日藤田は本邸に入り、彼女は別荘で雇ったという事にして、一週間後に男爵と俺と三人で本邸に乗り込む算段だという。

「君は、優秀な部下を持っているね。」

「いえ、ウチの者達に上下は有りません。皆、仲間ですから。」

男爵は、目を細めて言った。

「そういう所は、相変わらずなのだねえ。」

「は？」

「いや…君の仲間達は、本当に君の事を慕っているよ。」

と、にっこり笑った。

「彼女と、知り合いだそうですね。」

「ああ、古い知り合いでね。」

「どの様な知り合いか、お聞きしても宜しいですか？」

「彼女は、何も話してはいないのか？」

「はい。」

「そうか…。君が疑った様な関係では無いよ。彼女は、私の大切な友人だ。ある時を境に、ぷつぷつと消息を絶ってしまつてね。八方手を尽くして探していたんだが、正直生きているかさえも諦めていたんだ。」

遠い眼差しをしていた男爵は、俺に向き直り、

「君は、あの子が好きなのかね？」

と、聞いた。

「あ…いえ…彼女は、ウチの従業員で…仲間ですから。」

「でも、憎からず思っているのだろう？」

何もかも見透かす様な男爵の目に、俺は何も答えられなかった。

「今から40年程前になるか…維新の頃、私には共に戦う友人がいてね。戦う為に生まれて来た様な男だったが、その男にも想い想われる相手がいたんだ。」

「…？」

「その女性との幸せな生活を送る事も出来た筈なんだが、周りの信頼を一身に集めていた友人は、皆の想いを掲げて、そして一人で散つてしまった。残された女性の嘆き悲しみ様といったら…我々の胸は、えぐるられる様だったよ。」

「…。」

「西園寺君、女性を泣かせてはいけない。如何なる時にもだ！泣くのは…男だけで良いんだよ。」

真つ直ぐ向けられていた男爵の目が、ふっと和らいだ。

「彼女、泣いていたよ。君が倒れたのは、自分のせいだと自らを責めてね…。君の仲間達が、なだめるのに大変だったんだ。あんな彼

女を見たのは、久々だった。」

「…そうですね。」

「老人からの忠告だ。自分の心に素直になりたまえ。常に、一番大切なのは、何かを考えるんだ。」

「…はい。肝に命じます。」

「うちの孫達にも、君達のような仲間が出来れば良いんだが…。」

「瑠嘉君の話は、聞いています。」

「あれも、色々思う所が有ると思うのだが、感情を面に出さない所があつてね。」

「母親は？」

「子供を産んですぐに、本国に帰ってしまった。異国の生活は、耐えられなかったのだろう。」

「そうですね。」

「…君の若い頃の武勇伝は、聞いているよ。かなり無茶をした様だね。」

「若気の至りです。」

「妙なきっかけだが、交流を持ってみてはくれないか？」

「わかりました。」

一週間後、俺達は本邸に向かっていた。

俺達の素姓を知っているのは、執事と家政婦長だけだという話だ。本邸に着くと、主人を出迎える為に屋敷の者が一同に整列していた。車を降りると、彼女はスツと奉公人の列に加わり、主人を出迎える為に深々と頭を下げる。

帰宅の挨拶をする執事に、男爵が、

「こちらは、西園寺歳文氏だ。暫く当家に滞在してもらうので、取り計らう様に。」

と、言った。

宜しくと挨拶をし、執事の隣の藤田と目配せをする。

客室に案内した藤田が、荷物を運んで入って来た。

「執事見習いが、板に付いてるじゃねえか。」

「恐れ入ります。」

「で？今迄にわかった事は？」

「大鳥男爵の家族は、長男の奥方大鳥環30歳、その息子稔5歳。次男の息子瑠嘉12歳。以上です。使用人は、執事、家政婦長他メイドが8名、雑役夫が1人です。事件のあらましと、奉公人の履歴については、此方に……。」
と報告書を出した。

「素行に問題がある者は？」

「あえて言うなら、環でしょうか？夫の死後、社交場で浮き名を流している様ですね。」

「使用人は？」

「取り立てて、問題無いと思います。」

「その後、子供達の様子は？」

「特に何も……但し、性格がかなり屈折してます。」

「そうか……。」

「報告は、以上です。夕食は、食堂にて6時からになります。」

「わかった。建物の看取り図があったら借りて来てくれ。後は、市村を助けてやってくれ。」

「承知致しました。お客様。」

そう言うのと、深々と一礼して藤田は退室した。

あいつ、すっかり成りきってやがる。

夕食まで、まだ間がある。

おれは、報告書に目を通した。

最初の被害者は、5歳の稔。饅頭を食べたところ苦しみ出し、直ぐに医者の手当てがされ大事に至らなかった。

饅頭には、猫いらずが入っていたらしい。

2番目の被害者、瑠嘉が被害にあったのは、同日の夜。

自室に置かれた水注しに、同じ様に猫いらずが混入されていたらしい。

症状としては、瑠嘉の方が重かったらしく、一時は死線もさまよった様だ。

猫いらずが置かれていたのは、屋敷の物置。

誰でも入手可能だった。

それ以降、事件は起きていない。

ノックの音が聞こえ、返事をする、

「失礼します。」

と彼女が入って来た。

黒い詰め襟のワンピースに、ひだの付いた白いエプロン。

同じひだの付いた帽子を被りつたメイド姿が眩しい。

真吾が見たら、大喜びしそうだ。

「此方をお持ち致しました。」

と、屋敷の見取り図を差し出す。

「問題は、無いか？」

「はい、今の所特に。」

「わかった、引き続き頼む。」

彼女は、深々と一礼して退室する。

藤田の奴、彼女を見せる為にわざと寄越しやがって……たく。そろそろ時間だ。

俺は、食堂に向かった。

食堂に入ると、男爵が俺を紹介してくれた。

席に居たのは、環と稔。

瑠嘉は、体調が万全では無いという事で、自室に居るらしい。

薄紫の綸子の着物に金糸の帯、髪を大きく結い上げた環は、自分が魅力的であるという事を十分知っているという様な女だった。

「西園寺さんって、西園寺公の…?」

「不肖の息子です。」

「まあ、やはり。市井にいらつしやるといふ噂は、聞いておりましたのよ。でも、こんな素敵な方だとは、存じませんでしたわ。」

「恐れ入ります。」

「後程、サロンの方で、一杯如何です?」

「喜んでお付き合い致しますよ、奥様。」

隣に座る稔は、先程からチラチラと此方を盗み見ている。目を合わすと、はにかんで俯いてしまった。

食後、藤田にサロンまで案内され、紅茶を飲んでみると、今度は真っ赤なサテンのドレスにシヨールを羽織り、髪を下ろした環が登場した。

のっけから挑発するつもりか…、鬱陶しい…。

藤田が耳元で囁く。

「短気を起こさないでください…。」

わかってらあ。

「ご機嫌よう。西園寺さん。」

俺は、立ち上がって一礼する。

彼女はクルリと回ると、

「如何かしら、このドレス。亜米利加国から取り寄せただけれど。」

「

とても素敵ですよ。奥様。」

藤田は黙って2人分の洋酒を用意し、静かに出て行った。

「西園寺さんは、何をしにこの屋敷にいらしたの?」

隣に座った環は、杯を上げると俺の顔を覗き込む。

「男爵の此迄の功績や、ご家族の事を出版しようと思ひましてね。取材をさせて頂いているのですよ。」

「まあ、それでは、私達の事も？」

「そうですね…出るかもしれません。」

「この屋敷の事なら、私が一番詳しくてよ。」

「それでは、最近の事です。御子息が事故にあわれたそうで…。」

「あら、あの事も書くの？」

「一応、取材ですから。」

「そう…稔が饅頭食べたら、腹痛を起こしたのよ。」

「その饅頭は、どういう経路で稔君に？」

「さあ？誰かから貰ったんじゃないかしら？あの子、食いしん坊だから。」

「貴女が、与えたのでは無いのですね？」

「違うわ！私は…その時、外出していたし…。」

「その夜、瑠嘉君も大変だったとか。」

「ああ、瑠嘉ね。あの子は、度々問題を起こして皆を困らせるのよ。質が悪いの。あの容姿に人殺しでしょう？まるで、悪魔の子よ。」

「人殺し？どういう事です？」

「…これは、内緒よ。あの子は、義理の母親と、お腹の中にいた義理の兄弟を殺したのよ。」

「それは、それは…。」

「表向きには、事故って事になっているけど。あの子がやったのよ！私見たもの！」

「何をご覧になったのです？奥様。」

「あの子が、死体の側に立っていたのよ。私が悲鳴を上げると、あの子走って逃げ出したのよ。それって、犯人って事でしょう？」

「さあ、どうでしょうね？」

殺人未遂事件を調べていて、とんでも無い殺人事件迄出て来るとは…。

「私ね、西園寺さん。この家、嫌いよ…。」

そう言つて環は、俺の首に腕を回す。

「酔われたのですか？奥様。」

「老人と子供だけの家に、何があるというの？私は、まだまだ女として輝けるのに、跡継ぎである稔に縛られて、この家を出る事も出来ない……。」

環は、俺の胸に顔を埋める。

彼女の香水が、俺にまわりついた。

「酔いが回られた様だ。今宵は、此処までに致しましょう。」

そう言つと、俺は彼女の腕を外し、立ち上がった一礼する。

「そうね……。また、付き合つて下さる？西園寺さん？」

「勿論です。奥様。」

環は、嫣然と微笑み、俺を残して部屋を出た。

第4章（3）

入れ違いに、藤田と彼女が入って来る。

「お疲れ様です。大した猫被りでしたね。」

「ああ、疲れたぜ…。俺も、社交界と全く縁が無い訳でも無いからな。あれ位の対応なら、まあ何とかな…。」

そう言うと、俺は煙草を出した。

すかさず、彼女が火を付けてくれる。

普段そんな事をしない彼女の行動に、少し戸惑い、

「…済まない。」

と言うが、彼女は何も答えぬまま一礼した。

「何か、情報は？」

「稔が食った、饅頭の出所が分からない。あと、瑠嘉の義理の母親が、妊娠中に亡くなっている。瑠嘉が犯人かも知れないという話だった。」

「わかりました。双方情報を集めます。」

「宜しく頼む。」

俺はソファ―に身を沈め、紫煙を吐いた。

「市村が、瑠嘉の担当になりました。」

「そうなのか？」

俺は彼女に視線を移したが、彼女はテーブルの上を片付け、そのまま退室した。

「？」

「今夜、初めて接触したそうですが、余り良い感触では無かったですね。」

「それで、気にしてるのか？」

「いえ、その様な事は無いと思いますが…。」

「そうか…。」

屋敷内に居る時には、あくまでもメイドとして対応するつもりなの

だろう。

翌日、昼食が終わって庭を散歩していると、芝生の上に這いつくばっている彼女を見つけた。

「何をしている？」

声を掛けると、驚いた様に顔を上げた。

その時、

「何をしている、さつさと集める！」

と言う子供の声。

見ると、東屋に少年が座っていた。

髪は、金色に近い栗毛。白い肌に赤い唇、そして金茶色の目。

少年は、俺を見ると立ち上がった。

「はじめまして、西園寺さんですよ？僕、大鳥瑠嘉です。宜しく。」

「宜しく、西園寺です。体調は如何です？」

「ふふふ、嬉しいな。貴方は、僕を大人として扱ってくれるんですね？ありがとうございます。もう、大丈夫なんです。」

瑠嘉は、そう大人びた挨拶をした。

「ところで、彼女は何をしているんです？」

「ああ、あれは落とし物を探しているんですよ。」

「落とし物？」

そう話している所に、彼女がやって来た。

服も手も、泥で汚れている。

「坊ちやま、探して参りました。」

そう言って見せたのは、緑色のビードロ玉。

彼は、その玉の数を数える。

「18、19、20。うん、全部あるね。なんだ、泥だらけじゃないか。じゃあ、綺麗に洗って来るといいよ。」

そう言くと、今度は池の中にビードロ玉をばらまいた。

そして、顎をしゃくって彼女に命じる。

彼女は、何も言わずに池の中に入り、ビードロ玉を探し始めた。
何て事しやがる！

俺は、怒鳴りたい衝動を抑えて、務めて冷静に言った。

「酷い事を成されるのですね。」

瑠嘉は、ふふふと笑うと、

「あれは、昨日きたメイドなんだ。僕の所有物だもの。僕に従順じやないかね。」

「テストなんですか？」

「そう！わかつてるじゃない。先ずは、第1関門は突破したんだ。だからこれが、第2関門。」

「因みに、第1関門は？」

「聞きたい？」

と、瑠嘉は薄く笑った。

「ええ、是非……。」

「タベね、テストしたんだ。服を全部脱がせてね、ベッドに入る様に言ったんだ。」

嫌な予感が的中した。

俺は、後悔しながらも話を聞いた。

「あの女、悲しそうな顔して裸になってさ。でも、体中傷だらけなんだよ。背中なんか凄い傷でさ。思わず痛かった？って聞いたら、黙って抱き締めてくれてさ……。」

「……。」

「あんな女、初めてだよ。大概大騒ぎするか、体を投げ出して来るのに、あの女、僕の髪撫でて子守唄歌うんだもの。」

「それで？」

「なんだあと思ひながら、気持ち良くて寝ちゃったよ。」

俺は、内心安堵した。

コイツは、あくまでも子供なのかもしれない。

「テストは、いくつか有るのですか？」

「後、1つ。大概、2つ目で音を上げるんだけどね。」

「3つ目の時も、是非同席させて頂けますか？」

「ああ、いいよ。でも多分、数日掛かると思うよ。池の中のビード口玉なんて、そうそう見つからないからね。じゃあ、そろそろ僕は失礼します。」

「見ていなくて、良いのですか？」

「あの女は…ズルしたり、人の手を借りたりする女じゃ無いと思うよ…あなたは、手伝いたそうだけどね…」

そう言つと、ふふふと笑つて邸内に入つて行つた。

誰も居なくなつたのを確かめて、彼女に声を掛ける。

「大丈夫か！」

池の中で這いつくばつた彼女は、顔を上げ頷いてみせる。

「待つてろ、俺も行く。」

彼女は、慌てて大きく被りを振り、

「駄目です！」と拒否をした。

確かに、ここで瑠嘉の信頼を勝ち得る事は、必要かもしれない。しかし…。

「大丈夫です。」

彼女は、キツパリと言つた。

「…無理するな…」

そう言つて、俺は藤田の所に行き、事の顛末を話した。

「風呂と、着る物を用意してやつてくれ。」

「了解しました。」

「それと…夜遅くても良いから、俺の部屋に来る様に言ってくれ。」

「承知しました。」

しかし、その晩も次の晩も、彼女の現れる事は無かつた。

彼女の池さらいは、3日間を要した。

4日目の昼、俺は瑠嘉に呼び出され、庭の東屋に行った。

テーブルの上には、小さな器にビードロ玉が入っている。

「見てよ、西園寺さん。彼女、全部集めて来ちゃったんだよ。」

「その様ですね。」

「今まで、このテストにちゃんと合格した者は居なかったんだけどね。」

「ちゃんと、とは？」

「助っ人呼んだり、探したふりしてビードロ玉買って来たり……。」「成る程。」

「でも、彼女は自分1人で探したみたいだよ。夜中も池に入ってたからね。ふふふ。」

この野郎！と思いつながら、平静を保つ。

そこへ、彼女が紅茶を入れたカップを3客運んで来るのが見えた。

「このテストは、通った者が居ないんだ。」

瑠嘉はそう言うのと、俺にウィンクした。

彼女が東屋に着くと、瑠嘉は優しい声を出して言った。

「桜、本当にご苦労だったね。僕の大切なビードロ玉を見つけてくれて、ありがとう。何かお礼をしたいんだ……。そうだ、ちょっと待ってくれる？」

そう言つて、東屋の裏手の花壇に入つて行つて、一輪の大きな花を摘んで来た。

あの紫の花は……！

「綺麗でしょ？僕、この花好きなんだよ。知っている？トリカブトつて言うんだ。」

そう言つと、摘んだばかりの茎を握り締める。

茎からポタポタと雫が滴り落ち、下に置いてあつた紅茶の中に入つた。

「この花を君に送らせてもらつよ。でも、気を付けてね。この花、猛毒なんだ。牛なんかも、コロツと死んじゃうんだつて。」

そう言つて、彼女に花を渡す。そして、こう言つた。

「僕等のこれからの信頼の証に、一緒に杯を上げようよ。お酒と言

う訳にいかないから、紅茶で…ね、いいでしょう？」

そう言っと、トリカブトの雫の入った紅茶を、彼女に勧める。

彼女は、じっと瑠嘉の顔を見ていた。

「…馬鹿馬鹿しい、止める！」

「西園寺さんは、黙っててよ。これは、桜と僕の信賴の話なんだから。」

悲しそうな顔をして、桜はなおも瑠嘉を見つめる。

「やっぱりね、みんな嘘ばかりさ。誰も僕を信じちゃくれない。お前も、他の皆と一緒にさ！さあ、出て行けよ！」

そう瑠嘉が叫んだ時、彼女はカップを持ち上げた。

「あ…桜…だ…」

「止める…！」

俺が叫ぶのと、彼女が紅茶を口に運ぶのが一緒だった。

次の瞬間、俺が彼女のカップを叩き落とすのと、彼女が紅茶を飲み込むのが、スローモーションの様に見えた。

カップが落ち砕け散った瞬間、彼女の体がのけぞる。

「くそつたれ！」

俺は、彼女を抱えると、指を彼女の口に入れて紅茶を吐かせにかか

る。

「吐いちまえ！胃の中の物、全部吐くんだ！」

そして、怯える瑠嘉に向かって怒号を吐く。

「馬鹿野郎がつ！！一体デメエは何やってんだ！」

「あ…あ…ぼ僕…」

「すぐ大人を呼んで来い！それと、医者と水だ！急げ！」

瑠嘉は、足をもつれさせながら、邸内に走って行く。

俺は、残った紅茶を彼女に無理やり飲ませ、また口に指を入れて吐かせる。

彼女の体が震え、痙攣を繰り返す。

「お前も、馬鹿野郎だ！桜、しっかりしろっ！吐くんだ！」

邸内から、藤田が走って来る。

「口にした毒は？」

「アコニチンだ。胃洗浄しか手はねえ！」

「水を！」

水さしの水を飲ませようにも、彼女は歯を食いしばって飲めた状態じゃない。

藤田と頷き合うと、彼女の口を無理やり開けて、水差しから大量の水を流し込み、彼女を抱えると胃を押さえて無理やり吐かす事数回。

「今、俺達に出来るのは此処までだ。」

「医者には、既に連絡を取りました。」

「わかった。」

そう言っていると、俺は遠巻きに様子を伺う瑠嘉の元に行くと、有無を言わず平手打ちを食らわせた。

「つつ！」

「命を賭事なんかに使うんじゃないねえ。信頼が欲しけりや、信頼に足る行動を自分がしてからほざけ！それから彼女は、お前の玩具じゃねえ！よく覚えておけっ！」

頭の上から、どなり散らした。

「西園寺様！」

藤田が叫ぶ。

彼女は、呼吸困難を起こしていた。

「まずいな……。」

俺は、彼女の胸元を緩めると、抱え上げた。

「俺の部屋に運ぶ。」

瑠嘉が、走り寄る。

「ぼっ、僕の部屋に……。」

「何……？」

「さっ、桜は、僕物だ……。」

「お前、まだそんな事……。」

「いやだ！桜は僕物だ！桜は、桜はっ……。」

「……わかった。お前の部屋に案内しろ。藤田、家政婦長に彼女の着

替えをさせる様連絡しろ。後は医者が来たら、瑠嘉の部屋に寄越せ。

「承知致しました。」

第4章（4）

家政婦長がやって来て、彼女を使用人部屋に移すと言っても、瑠嘉は頑として自分の部屋で面倒を見ると、きかなかった。

流石の家政婦長も諦めて、着替えさせるから退室する様に言っても聞かなかったが、これは俺が抱えて連れ出した。

「何するんだよ！僕は、桜に付き添うんだ！」

「だから、着替えるって言ってるだろうが！」

「大丈夫だよ！僕は、桜の裸見てるもん。」

「馬鹿野郎！そんな事、ベラベラ喋るんじゃない！」

「そうなの？」

ああ、やっぱりコイツはガキだ…。

「彼女の名誉の為だ。黙つとけ。いいな？」

「…わかった。」

と、素直に頷く。

そこに医者が到着したので、引き続き俺達は廊下で待機していた。しばらくして、招き入れられる。

「胃洗浄をしたのが早かったので、良かったですね。適切な処置でした。今の段階では、このまま様子を見るしかありません。急変する様であればご連絡下さい。直ぐに参ります。」

「わかりました…。」

「それにしても、一体何があつたのです？アコニチン中毒ともなれば、私も警察に届けなければならない。」

「事故です。」

俺は、言った。

「トリカブトの花と知らずに摘んだ花束の雫が、飲み物の中に混入してしまつた様です。私が見ていたので、間違いありません。」

「そうですか…わかりました。」

訝しんだ様子を見せたが、医者は何も言わず帰っていった。

家政婦長は、俺に深々と礼をする。

「瑠嘉が駆け込んだ時に、誰がその場に居ましたか？」

「丁度、執事と藤田と私だけでした。」

「そうですね。それでは、一切他言無用に願います。彼女は、池さらいで熱が出たとても……。」

「承知致しました。ただ、旦那様だけには報告させて頂きます。」
「そう言うと、部屋を出て行った。」

「僕を……庇ってくれたの？」

「馬鹿野郎、彼女を庇ったんだよ。」

「え？だって……。」

「確かにお前は、カップにトリカブトの雫を入れた。たが、それを毒と知りつつ飲んだのは、彼女の意志だ。」

「……。」

「それに、ガキを守るのは、大人の仕事だ。」

「やっぱり、僕ってガキだよ……。」

「自覚してりやあ、それでいい。」

瑠嘉は、寝ている彼女の手を握り、俺に聞いた。

「どうして桜は、毒って分かってて飲んだの？」

「……お前の事を、愛してるからに決まってるだろう。」

「僕を？だって、僕は桜に酷い事ばかり……。」

「彼女は、お前の心の叫びを聞いた。狂おしい程愛して欲しいと叫ぶ声をな。だから、答えた。自分もお前を愛していると。」

「……。」

「お前は、自分が叫ぶばかりで、聞こうとしてねえんだよ。さっきの家政婦長だって、執事だって、皆お前を愛してる。」

「……お祖父様も？」

「男爵が、一番お前を愛してるだろうが。」

「……そうなんだ。僕はつきり、皆に疎まれているとばかり思ってた……。」

「やっぱり、ガキだな。」

「だって、環伯母様は僕の事…悪魔の子って…」

「…あれは、誤解してるんだ。」

「僕はね…、僕の事を好いてくれているのは、稔だけだと思っていたんだ。稔はまだ小さいから、何も分からないからね。僕の髪も目も、稔だけは気味悪がらなかった。」

「…。」

「桜はね、最初の晩、僕の髪を撫でながら、綺麗ですって言うてくれたんだ。僕の目も、お日様色の綺麗な目だって。自分は、月の明るい、満天の星空を切り取った様な色をした瞳も好きだけど、キラキラ輝くお日様色の僕の瞳も好きだって…。あれ、貴方の事でしよう?」

俺は、自分の目を押さえて聞いていた。

「…かもな。」

「お祖父様に聞いたんだ。貴方、僕と同じなんだってね。」

「ああ。」

「苦しくなかった?自分が1人だと、思わなかった?」

「苦しくなかったなんて言わない。嘘になっちまうからな。でも、俺には赤ん坊の頃から俺を愛してくれる乳母が居たんだ。それに、ガキの頃からのダチも居たのが大きかったな。」

「ダチ…友達だね?でも、僕には出会っ機会が無いよ。」

「一応、社交界で出会ったんだぜ。」

「えっ?」

「いきなり、向こうから喧嘩ふっかけて来たんだがな。その理由が、何だか気にいらねえっていうんだから、笑っちゃう。」

「へえ…。」

「俺もこんなだから、社交界に顔出すのは億劫だな。でも、売られた喧嘩は買ってやるっていう、負けん気の強さは人一倍だな。それから、喧嘩する為に社交界通いしたもんさ。お陰で、2人して鼻つまみ者さ。」

「喧嘩していて、仲が良いの?」

「ああ、あれはいつだったかな？余り社交場ばかり荒らすのもって事で、俺んこの別邸でな…」

そうだ、何故思い出さなかった？

この間、キヨが話してくれた伊豆の別邸の姉やの話。

俺達が喧嘩していた時、勢い余って深い池に落ちちまって。

慌てて姉やが飛んできて、2人を助けてくれた。

その後、一緒に風呂に入れられ、飯を食わされ、昼寝まで一緒にさせられ…昼寝から起きて、スイカを食べながら

「まだ続けられますか？」

って聞かれて、流石に馬鹿馬鹿しくなつて…。

あれから、何をするのも真吾と一緒にだった。

キヨに話を聞いた時は、うる覚えだったが、こうして思い出すと、彼女にそっくりだ。

というか、生き写しじゃねえか！

「西園寺さん？」

「ああ、いや…。」

「今も、仲が良いの？」

「ああ、腐れ縁だ。ずっと一緒に居る。」

「僕にもね…小さい頃は、すごく優しくしてくれる人が居たんだ。

色の白い、細い指の人だった。僕の兄弟を産んでくれるって言ったんだ。」

「…。」

「僕達は、手を繋いで庭の階段を上ってた…。もう直ぐ上りきる所で、僕は…僕は躓いて…。」

瑠嘉は、涙声になりながら、必死に続けた。

「僕を支える為に…今度は…その人がバランスを崩して…。僕は、

その人の手を必死でひっぱった！でも…その人は…僕の手を離したんだ。」

そういう事か。

瑠嘉の目から、大きな涙が溢れる。

「階段から落ちたその人は、いっぱい血が出てた。僕はびっくりして…。あの人は…大丈夫…僕のせいじゃ無いって…その時、叫び声が聞こえて…僕は…僕は…」

瑠嘉は、とうとうしゃくりあげて泣き出した。

「それは、お前のせいじゃ無い。」

「でも…」

「それは、その人が大人だったから、子供のお前を守ったんだよ。」

「えっ？」

「その人は、手を離れたんだろう？手を繋いだままだと、お前も一緒に落ちちまう。だから、お前を守る為に手を離れたんだよ、お前のお義母さんはな。」

「あ…。」

「お前は小さ過ぎたんだ。その事を誰かに話していれば、大人は分かってくれただろうに。怖くて誰にも話せなかったんだろう。」

瑠嘉は、頷く。

「これからは、誰かに何でも話すんだな。」

「桜がいる。これからは、桜に話すよ。」

俺の胸は、チクリと痛んだ。

捜査が終われば、彼女は屋敷から出て行く…。

「男爵に聞いて貰うといい。」

「お祖父様に？」

「メイドに話すのもいいが、身内が一番だしな。それに、お前の立場、身の処し方、一番分かってくれて、適切な助言をくれるのは、男爵だろう。」

「そうか、そうだね。男同士だしね。」

「そうだ。」

「貴方にも相談していい？」

「えっ？」

「僕、貴方にも相談したい！お兄様みたいで…駄目？」

「ああ、構わないが、俺に適切な助言が出来るとは思わないがな。」

「良かったあ！」

ノックの音がして、藤田が顔を出し、男爵が呼んでいる旨を伝えた。
「瑠嘉、彼女を頼んだぞ。もし様子がおかしくなったら、直ぐに藤田か家政婦長を呼ぶんだ。」

頷く瑠嘉と彼女を残し、俺は部屋を出た。

「所長、自分が残った方が良かったのでは？」

藤田が、小声で尋ねる。

「いや、大丈夫だ。彼女も、大分落ち着いた様だしな。」

「西園寺君、済まない。彼女の様子は、どうだね？」

「大分落ち着きましたので、ご安心を。」

「一体、何が起きたか話してくれるかね？」

俺は、事の顛末と、その後の瑠嘉との会話を男爵に話した。

「君に偉そうな事を言っておきながら、私は彼女を危険に晒してしまった。本当に申し訳無い。」

「彼女を、誉めてやって下さい。彼女は、瑠嘉の心を救った。」

「それは、君にも言える事だよ。本当にありがとう。」

「これからは、男爵の力です。アイツの心は、愛して欲しくて血を流している。思い切り、愛してると伝えてやって下さい。抱きしめて、間違った時には、叱ってやって下さい。アイツは、瑠嘉は、ただの子供だ。」

「そうだな…心で思うだけでは、伝わり様が無いな。」

「今の瑠嘉に必要なのは、男爵の愛情と、友達です。」

「うむ…。」

「男爵は瑠嘉の将来を、どうお考えですか？市井に出すおつもりですか？」

「彼の希望も有るだろうが、私はその方が良いと考えている。」

「ならば、最初から市井の者達と触れ合いを持たせるのも、良いかもしれません。」

「それならば……」

と、藤田が口を挟む。

「道場通いは、如何でしょう？」

「その手があつたか！」

「はい。私の父は、市井で小さな道場を行っています。かなり厳しいのですが、其方で良ければ紹介出来ます。ただし、無党流ですが……。」

「失礼だが、お父上は？」

「藤田五郎といえます。以前、男爵が蝦夷地で御一緒だった方と、昔京都で一緒に働いておりました。」

「何だと！」

その反応に、俺の方が驚く。

「その頃の……お父上は？」

「斉藤一という名前で、市中見廻りを仕事としていた様です。」

「三番隊の斉藤君か！確か彼とは、会津で別れたと言っていた。」

「はい。」

「そうか、彼も生き延びたんだね。わかった。間違いあるまい。瑠嘉にその気があるならば、是非ともお願いしよう！」

「承知しました。」

男爵の部屋を辞した俺達は、再び瑠嘉の部屋に向かって歩いていた。

「お前の親父さん、そんな凄い人物だったのか？」

「父は維新の頃、男爵と同じ旧幕軍だったんです。たまたま同じ知り合いが居ただけの話です。」

「そうか…。そういえば、この間男爵から、維新の頃の友人の話を聞いたっけな…。」

齊藤一…三番隊…。

何となく聞き覚えがあつたんだが…気のせいかな？

おれの父は新政府軍側だったから、旧幕軍時代の知り合いが居ると思えない。

最も今じゃ、入り乱れているが…。

第4章（5）

部屋に戻ると、彼女の傍らに瑠嘉が寝ていた。

彼女は、起きて瑠嘉に布団を掛けようとしている。

俺は藤田に、瑠嘉を俺の部屋で休ませる様に指示をして、自分は彼女の枕元に座った。

藤田は、瑠嘉を抱え上げ、そっと出て行く。

2人きりになると、重苦しい沈黙が続いた。

「何故だ？」

先に口を開いたのは、俺だった。

彼女は、何も答えない。

「答える！桜！！何故飲んだ！」

俺は、彼女の肩を掴み揺すった。

「俺は…お前を雇う時、自分の命を大切にしろと言ったよなあ！その約束を守らないってんなら、お前を雇っておく事は出来ねえ！」

「…すみません。」

消え入りそうな声で、彼女は謝る。

まだ体調が戻っていないのだろう。血の気の失せた顔が、余計に白くなる。

彼女の顔を見ると、氣遣う気持ちより、俺は自分の中の怒りを抑える事が出来ず、彼女を乱暴に布団に投げ倒した。

布団に倒れた彼女は、そのまま涙を流す。

「俺は、仲間が傷付く事が何より嫌いなんだ！」

夕日がベッドまで差し込んで、彼女の背中を赤く染めた。

「…お前まさか、死にたいとかって思ってるんじゃないだろうな？」

彼女は、ビクツと体を痙攣させた。

「お前が、自分はどうでもいいって思っている様に見えるのは…全てを投げ出してもいいって見えるのは、俺の気のせいだよな？」

「……」

「俺達の所に来た時の、生きる事にも誇りの為にも、あがらう気持ちを無くしちゃったのか？なあ、俺達の所に来たのは、間違いじゃねえよな？」

再び彼女を抱き起こし、彼女の身体を揺すった。

「なあ、お前の未来の夢って何だ？それは、生きる糧にはならないのか？」

「私の……ずっと長い間……思っていた夢は……も……う……叶ってしま……った……から……」

そう息も絶え絶えに言うと、彼女の意識は切れた。

「さくら！」

彼女の体は、グニヤリと俺の腕の中に落ちる。

その身体を抱き締めて、俺は呟いた。

「未来を……お前との未来を夢に見るのは、俺だけって事かよ……」

彼女を寝かせると、俺は深いため息を付いた。

彼女は、俺達の所に来て楽しそうに生活をしていたし、甲斐甲斐しく世話も焼いてくれた。

決して、無気力になる様な生活は、していないはずだと信じたい。

「願いが叶ったって、何だよ！」

岩崎邸を辞める事が、出来たって事か？

そんなちっぽけな物か？

こんな時は、奴に無性に会いたくなる。

俺は事務所に連絡を入れ、真吾に迎えに来てもらう事にした。

「夜には戻る……」

そう藤田に言うと、俺は上着を持って大鳥邸を出た。

「……事務所、戻るか？」

車に乗り込むと、何かあったのを察した様に真吾が聞いた。

「…キヨは？」

「一昨日から湯治に出してやった。戻りは、明日だ。」

「…事務所にやってくれ。」

久々に戻った事務所のソファーに、俺は横たわる。羽虫が一匹、電灯の周りを飛んでいた。

真吾は黙って、俺の前に日本茶の入った湯飲みを差し出した。

「…桜が…毒を飲んだ。」

「ああ、藤田から電話で聞いた。顛末も含めてな。」

ソファーに座り直し、額の前で両手を組んで、俺は話を続けた。

「俺は…桜が飲むのを、分かっていたんだ。なのに、止められなかった…。」

「…。」

「あいつ、此処に来て変わったよな？」

「そうだな。明るくなった。毎日が、楽しそうに見えるぜ。」

「いや、何ていうか…満足仕切って、もうこれでいいって思っちゃまってる様な…。」

「？満足なら、良いじゃねえか。」

「そうじゃ無くて…あいつ、全てを投げ出しちまうんだ。自分の守った来た誇りも、命も…。なんか、もう死にたいっていうみたいに…危うくて。」

「それは…。」

「満足しちまって、もう守る必要が無い様に俺には見える…。」

「…。」

「あいつを此処に置いたのは、間違いだったんじゃないかって気がしてな…。未来の夢は、生きる糧にはならないのかって聞いたたら、ずっと長い間思っていた夢は、叶っちゃったんだとよ。何だよ、全く…。」

「で、お前はそれを彼女にぶつけて、1人落ち込んでるってか？」

「…。」

「それじゃ、言つてやろう。お前は、阿呆うだ！」

「何だと?!」

「何度でも言つてやる。阿呆うだ！」

「…っ。何なんだよ。」

「桜は、幸せなんだよ。此処に来て、幸せ噛み締めて生きてるんだ。」

「だつたら…。」

「惚れた男の役に立ちたい。その一心で、毒も煽りやあ子供の我儘にも我慢する。背中を守る様に、小太刀の練習も再開した。」

「…。」

「お前、今、藤田を疑つたろ？」

「…っ！」

「まあ、藤田自身は、憎からず思つてるだろうがな。今のアイツは、姫を守る騎士様だ。多分、誰かに言われたんだろうよ。」

「誰に？」

「恐らく、桜の小太刀を預かっていたという人物。そしてそれは、俺の見る所、十中八九藤田の親父さんだ。」

「！」

「気が付かなかったのか？全く…。恋は盲目とは、よく言つたもんだぜ。」

「うるせえ…。」

「彼女の想い人は、お前だトシ。彼女を見てれば分かる。だからこそ、藤田も手を出さない。」

「…。」

「後は、お前が桜の手を取つてやるだけだろうよ。」

「…未来を夢見てるのは、俺だけだ。彼女は、捨てちまつてる様に見える。」

「お前なあ。」

「不安定なんだよ。身体も心も！そんな女を、どうやって捕まえれ

「ばいばい？」

「彼女が危ういのは、全身全霊で物事に当たるからだ、俺は思っ
ぜ。小手先で物事捌く様な女じゃ無いからな。お前…ちゃんと、彼
女に気持ち伝えたのか？」

「いや…言っちゃまうと、すり抜けてしまいそうだな…。」

「桜が、現状維持を望む気持ちもわかるしなあ…。」

「どつという意味だ？」

「はあ？トシ、阿呆うの上に馬鹿が付くのか？てめえは？」

「てめえ、喧嘩売ってんのか！」

俺は、真吾の胸ぐらを掴んだ。

「ああ、売ってやらあ！」

そう言っていると、真吾も俺の胸ぐらを掴んで対峙した。

「てめえは、忘れちまつてるかもしれないなあ！」

真吾の拳が、みぞおちに入る。

「お前は、市井には下ってるが、れっきとした公爵閣下のご子息様
なんだぞ！」

頬に一発拳を食らうと、俺は床に吹っ飛んだ。

「…っ！」

息を弾ませて、真吾は言い放つ。

「身寄りの無い彼女が、手を伸ばせる相手じゃ無い事位、子供だっ
て分からねえ！」

久々に真吾に食らった拳よりも重いものが、ズシンと胸に打ち込ま
れた。

「…真吾…済まない。」

「…目え、覚めたか？」

「ああ。」

「そいつは、良かった。」

そう言っていると、手を差し出し俺を起こす。

「仕事の話だかな？」

「ああ、聞こう。」

「環の浮気相手に、鷹取って奴がいてな。名前ばかりの貴族様で、内情は火の車らしいんだが、近い内に金には困らなくなるって、うそぶいてるらしい。」

「うむ…。」

「組関係とも連んでる様で、どうもきな臭い。」

「何処の組だ？」

「…堂本組。」

「あそこか…。」

武党派の堂本組は、以前俺達が関わった事件に関与し、その折り半壊滅したが、代替わりして又勢力を盛り返して来たと噂で聞いた。

「そっちは、橘さんに連絡を取って、動きがあつたら封じる様に頼んでくれ。」

「鷹取の方は？」

「それは、こっちから仕掛けてみる。」

「いつものトシらしくなって来たな。」

真吾はニヤニヤしていたが、急に真顔になって、

「お前、桜に解雇するって、口にしちまつたろう？」

「…ぐっ！」

「全く…ちゃんと、撤回しとけよ。」

「ああ。」

「じゃないと、彼女…本当に消えちまうぞ。あいつは、こっちの言葉も思いも、全身全霊で受け止めちまうんだろっからよ。」

「…分かつてる。なあ…。」

「ん？」

「彼女の…桜の叶っちまった夢って、何だと思う？」

「そんなの、お前と一緒に居る事に決まってるじゃねえか。」

「…なんか、おかしくねえか？」

「何が？」

「夢って、ずっと思い描くもんだろ？」

「ああ。」

「桜がウチに来て、たかだか2ヶ月だぞ。」

「ああ。だから？」

「彼女…ずっと長い間思い描いていた夢だって言っただ。」

「それでも、お前の側に居るのが、彼女の幸せな事に間違いねえんだよ。」

真吾は、そう吐いた。

「俺は…怖いんだよ…俺と一緒に居る事で、彼女が命を縮める事が…。」

「お前…。」

「それなら、いつその想いを封印して、彼女を送り出してやる方が、彼女の為にいいんじゃないかと思う。」

「…。」

「さっき、お前が言った様に、彼女が俺の身分で負担に思ってるなら尚更だ。瑠嘉に言ってる場合じゃねえ。俺自身が、大人にならなくてどうする？俺は、彼女に女として幸せになつて欲しい…。」

「彼女の幸せの形は、彼女が決めるもんだ。彼女がお前から離れて、幸せになれるとは、俺には思えねえがな。」

「…。」

「馬鹿だから、お前は言っちゃまうんだろうなあ…。そして、彼女を泣かす…。」

「そうだな…。」

「言つとくが、俺は女を慰める方法、一つっきゃ知らねえんだぜ。」

「…。」

第4章（6）

夜半、大鳥邸に戻った俺は、再び彼女の元に戻る。

部屋には、藤田が付いていた。

「あれから一度目を覚ましましたが、今は休んでいます。状態も安定している様です。」

「済まなかったな……。」

「新しい客室を、用意しましょうか？」

「いや、いい。今夜は、付き添う。」

「わかりました。此方に毛布を用意しましたので、お使い下さい。」

「…藤田。」

「はい。」

「ありがとう。」

藤田は、口の端を上げて微笑むと、部屋を出て行った。

彼女は、静かに眠っていた。

胸には、あの懐中時計が握られている。

藤田が持たせてやったのだろう。

そつとその手に触った時、気配を感じたのか、彼女の目がうつすら開いた。

「済まない、起こしちゃったか？」

そして、起き上がろうとする彼女に手を貸した。

「さつきは、済まなかった。」

彼女は被りを降り、俺の顔を見上げると、少し眉根を寄せて手を俺の唇に寄せる。

当たった指先が、ひんやりと冷たい。

心配そうに唇の端を触る手を思わず握り締め

「大丈夫だ。ちょっと真吾とやりあったただけだ。」

そう言い、握った手に口付ける。

驚いた様に退こうとした手を握ったまま、もう一方の腕を背中に回

して腕の中へ捕らえる。

「桜…俺は…」

彼女は、身を固くしたまま聞いていた。

「俺は、お前に側に居て欲しい…。だが、俺の側に居ると、お前は此からも命を投げ出しちまうだろう。」

彼女の髪を撫でながら、俺は続けた。

「俺は、お前が傷付くのを見たく無いんだ。」

そつと身体を離し、彼女は俺の目を覗き込んだ。

「…何を、仰りたいのです？」

「お前は…俺達から離れる。」

彼女の瞳に、絶望の色が広がる。

「…お側には、置いて頂け無いのですか？」
みるみる涙が溢れる。

「俺は、お前に幸せになつて貰いたいんだ。」

「私は、今のままで十分幸せです！」

「お前は、このままでいいと思つてる…この先の未来を考えちゃいないだろう。もし、俺が正式に申し込んでも、お前は受けるつもりが無い。違うか？」

「それは…」

「俺は、女としてお前に幸せになつて欲しいんだ。惚れた男と結婚し、子供を産み育てる…。そんな、当たり前前の幸せにな。」

彼女の手が、俺の両頬を包む。

「前にも言つたじゃないですか…私に女としての幸せは必要無いと…。」

「桜…？」

「お側に置いて頂くだけでいいんです！それ以上は、何も望まないと言つたじゃありませんか！なのに…」

彼女は、支離滅裂な感情を爆発させる。

「貴方は、また私を置いて行つてしまふの？これ以上貴方を失うなんて、私には耐えられない！」

「しつかりしろ、桜……」

「嫌です！私に離れると仰るなら、いつそその手で殺して……」
錯乱状態にある彼女を、俺は抱き締めて言った。

「愛しているんだ、桜……だから……」

「いやあ、いや……！」

「俺の心は、いつもお前と共にある……」

「……貴方は、いつもそう……自分の心だけ押し付けて……私は、いつも置き去りにされて……私の心は、一体何処に行けばいいの……？」

彼女は、ふらりと俺から離れると、ベッドから懷中時計を拾い上げる。

「やっぱり、私には……此しか残されないのね……」

そう言うと、俺を振り返らずに言った。

「西園寺さん……何故私を助けたんですか？あのまま逝けたら、私は幸せな一生で終わっていたのに……」

そう言うと、部屋のドアを開けた。

ドアの外には、腕を組んだ藤田が壁にもたれたまま立っていた。

彼女は、藤田をも無視して通り過ぎる。

ため息をついて、藤田が此方に流し目を送る。

「酷な事をなさる……」

「……多分……表に真吾が居る。送らせてくれ。」

「本当に宜しいんですね？」

「……ああ。」

藤田は、彼女を追って行った。

これでいいんだ……そう自分に言い聞かせ、ベッドに座り込む。

先程迄、彼女が寝ていた温もりが残されている様な気がして、俺は布団に顔をうずめた。

彼女の残り香を、胸に吸い込む。

また、泣かせちゃった。

今は泣くかもしれない。でも、これが最後だ。

やがて彼女にも新しい生活が始まり、惚れた相手が出来、結婚して子供が出来て……平凡だが幸せな家庭を築くだろう。

そう、その隣に俺が居ないだけの話だ。

「真吾が、連れて帰りました。」

「そうか。」

「魂の脱け殻というのは、ああいうのを言っただけでしょうね。」
「……」

「何故、受け止めてやらなかったんです。」

「蒸し返すな。俺は、彼女を幸せに出来ない。」

「幸せの形は、様々だと思いますが。」

「お前も、真吾と同じ様な事を言いやがる。……俺の親父は、本妻を持たねえ。ウチの本尊が弁天様で、本妻を持つとやきもちを妬くからってうそぶいてるがな。芸妓を囲って、妹達を生ませた。子供はいいさ。籍も世間体も西園寺の子供として認められる。だが、あの人が日陰の身で苦労してる姿を、俺はずっと見てきたんだ……。彼女にあんな思いは、させられねえ……」

人知れず泣いていた女達の姿が思い出される。

「不自由なものです。貴方達の世界も……」

「諦めたつもりだったんだがなあ……今更ながら恨めしくなる。」

庭から、夏虫の声が聞こえる。

「市村の今後の事、どうされるのです？」

「この屋敷での奉公を望むなら、仕事が全て片付いた後に、もう一度男爵に頼んでみようと思う。お前と真吾で、彼女の意味確認をしてももらえるか？」

「わかりました。」

「落ち着くまで、あそこに住まわせてやってくれ。俺は、仕事が終わるまで帰れないからな。」

「会わないおつもりですか？」

「…そうだな。会えば、お互い辛いだけだ。」

「…。」

俺は、少し躊躇いながら藤田に聞いた。

「藤田：お前が、彼女を…。」

「止めて下さい！市村が、そんな事を望むはずが無い！」

「お前は、どうなんだ？」

「…。」

藤田は誠実な男だ。俺や真吾の様な、しがらみも無い。

「お前の親父さんと彼女も、浅からぬ付き合いなんだろう？」

「どうして、それを！？」

「真吾が、気付いたんだよ。」

「俺は…父と同じ様に、ずっと市村を見守っていくつもりです。」

「…そうか。」

「所長は、どうなさるのです？」

「俺か？俺は、そうだな…今迄通り、仕事に生きるさ。まずは、この仕事を解決しないと。」

翌朝、彼女が居ない事で瑠嘉はゴネたが、彼女の身体のために実家に戻ったと言うと、渋々納得した。

道場通いも興味を示し、今は屋敷内で基礎体力を養っている。

俺は、ポツカリと開いた胸の隙間を埋める様に、勢力的に動いた。環と共に社交場にも顔を出し、環の新しい相手として顔売って、様子を見ている。

鷹取とも会って、言葉を交わした。

「で、印象は？」

「露骨に嫌な顔しやがった。何か陰湿な野郎だ。」

真吾と落ち合った河原で、俺達は子供に混じって石を投げていた。

「そりゃ、かつて社交界のミッドナイトブルーと言われたお前が相手じゃなあ。その目に落ちない女は、居なかったからな。」

そう言くと、真吾は腹を抱えて笑った。

確かに、女からの誘いは多かった。手紙も、連日の様に舞い込み、それに絡む男からの果たし合いも、後を絶たなかった。

皆、この目が珍しかっただけの事だ。

「堂本組の動きはあったか？」

「今の所、とり立てては無いが、そろそろ焦って来てるのは確かだな。それとな、堂本組の下っ端が、男爵の家のメイドと良い仲だそうだ。」

「相手は？」

「そこまでは、掴めねえ。藤田に探りを入れさせるか？」

「そうだな。」

「他に、俺に聞きたい事が有るんじゃないか？」

「…。」

「結構、大変な事になってんだけどな…。」

「どういう事だ？」

「まずな…あの後3日、桜は俺の腕の中で過ごした。」

「…！」

「心配すんな。食ってねえよ。確かに、我慢するのは、かなり骨が折れたけどな。」

とニヤリと笑った。

「体調も戻って無い上に誰かの酷な告白で、殆ど寝れない上に錯乱状態で、ずっと抱き締めて泣かせてたんだ。お陰で、俺の胸はビタビタよあ。」

「…すまん。」

「4日目に、ようやく自分のベッドに寝てくれたんだがな…。」
「どうした？」

急にトーンダウンした声に不安になる。

「次の朝、物凄い叫び声に、俺もキヨさんもビクリして桜の部屋に飛んで行くと、耳を押さえて叫び声上げててな…。」

「…で？」

「耳が聞こえないっていうんだ。」

「！」

「医者に診せても、原因が掴めねえ。多分、精神的な物だと言いやがった。」

「…。」

「その日一日中叫んで、血まで吐いて、次の日には声まで失って…。そこまで来ると桜も諦めたんだろうな。部屋に籠もってたんだがな。数日後、部屋に行ったキヨさんが今度は叫ぶんで、慌てて部屋に行くと、桜が床に這いつくばって時計探してるんだよ。目の前に落ちてるのに、見えて無い…。」

俺は、その場に座り込んだ。

「流石にキヨさんも参っちまってな。西園寺に連絡して、伊豆に行つて貰ったぞ。」

「悪い…。」

「困ったのは、彼女の方だ。藤田と相談したら、藤田の親父さんが刀持つてやつて来た。」

「刀？」

「凄かったぞ！お前にも見せたかった！」

「何があつた？」

「桜を庭に連れ出して、小太刀を持たせてな。『市村！刀を抜け！』つて言つたら、桜の奴刀を抜いたんだ。桜が打ち込むのを、暫く受けてたんだが、彼女の目が真剣になってきたのを見計らつた様に、一歩下がつて刀を収めた。彼女が気を高めて打ち込んだ時、親父さん抜刀したんだ。トシ、俺凄いいもん見ちまつた！」

身振り手振りで説明していた真吾は、興奮して言った。

「抜刀した刀を桜の喉元に突き付けて、『お前の迷いを、俺が今切つて捨てた』つてな。」

「…。」

「そしたら、彼女の目が見える様になって、様子見てたら、多分耳も大丈夫だと思う。」

「声は？」

「いや…声はまだ駄目だ。喉の傷は治って、医学的には問題無いらしいがな。でも、まあ焦ってもしようがねえ。」

「そうか…。」

第4章（7）

「彼女、藤田の親父さんの家に暫く預かって貰った。」

「そうか。」

「藤田の親父さんがなあ、桜に約束してたのを聞いちまった。絶対に自分から命を絶つ事を禁ずるってな。」

「…。」

「で、どうしても駄目な時には、自分が苦しまない様に、引導渡してやるってよ。」

「そう言ったのか？」

「ああ。武士が約束する時の…金打っていつのか？桜と2人でしていた。そうしたら桜、憑き物が落ちた顔して、やっと笑ったんだ。」

「やはり、ずっと…」

「ああ。考えてたんじゃないか？自分が引導渡してやるって…間違ってるのかもしれないが、そういう愛し方もあるんだと思った。ある種、究極の愛の形だな。」

「…そうだな。だが、俺には出来ない。」

「俺にも無理だ。ありや、本物の武士だぜ。」

「旧幕軍の生き残りだそうだ。というより多分、新撰組の…。」

「本当かよ！」

「ああ。」

「俺も、あの人の道場通おうかな…。」

彼女の身体に障害を残し、自害を考えさせ、他人に殺してもらおう事で安堵する様な思いをさせて、本当にこの選択が正しい物だったと言えるのか？

だが、今の俺に何をしてやる事が出来る？

俺が出来るのは、この責めを一生背負って行くしかない…。

「なあ、トシ。」

「ん？」

「お前、前みたいに、腹の中見せなくなったな。」

「そうか？」

「桜の話、聞くのが辛ければ…。」

「いや、報告してくれ。全て…な。」

「俺：言って無い事、1つあるぞ。」

「なんだ？」

「トシ、お前…桜の身体に…その、触れてやらなかったのか？」

「お前、何を…！」

俺は思わず、真吾の胸ぐらを掴む。

「だから、食って無いって。だけど、見ちまった…桜の肌をな…。」

真吾を軽く突き飛ばし、俺は言った。

「吉原でも行って、記憶から消しちゃえ…。」

「いや、ありや無理だろう。あんな壮絶なもん、男でもそう居ねえ。」

「

「？」

「うら若い娘が、どうやったらあんな傷だらけの体になるんだ？」

「まだ、治ってないのか？岩崎邸での傷が？」

「いや、違う。それは治ったと思う。じゃなくで、銃痕やら刀傷や

らが、身体の至る所にあってな…極めつけが、背中 of 袈裟懸けの傷。

「

「何だと？」

「かなりの深出だったと思うぜ、ありや。」

「…。」

そういや、瑠嘉が言ってたな…傷だらけだと…。

「戦場でも行ってたって事か？でも日露の頃は、14、5だろ？日清の頃は、子供だしな。まさか、前世の傷をそのまま引き継いで生

まれるなんて事、ねえしなあ。」

「…真吾、調べて欲しい事がある。」

「何だ？」

「桜の履歴だ。」

「お前：何だってそんなもん。」

「良いから、調べてくれ。」

「…わかった。」

先の戦いで、女が戦場に向かうなんて有り得ない。

廃刀令が出たのは、俺が生まれる前：たしか明治5年だったはず。

じゃあ、その傷は何時？

彼女の言葉で、腑に落ちない点が多々あった。

俺が、彼女に離れる様に言ったのは、今回初めてだ。

しかし彼女は、過去にも俺が言ったと主張した。

興奮して支離滅裂になっていると思うていたが、それだけでは無いのかも知れない。

彼女の過去に何があったのか、改めて知らなければならぬ…そんな気がした。

数日後。

男爵とサロンで談笑していると、外出していた環が入って来た。

男爵は、黙って席を立つ。

そんな事は一向に構わない様に、環は俺の隣に座り、俺のグラスを取り上げて中の液体を飲み干した。

「何か、嫌な事でもありましたか？」

「どうもこうも、無いわ！貴方が一緒に行って下さらないから、いけないのよ！」

「どうなさいました？」

「鷹取が、しつこいっただら無いのよ！貴方とどういう関係かって。」
「それは、それは…。」

「だから言っちゃったのよ。貴方が想像している通りの関係だって…。」

「ほう。」

「そうしたら鷹取が、西園寺がどうなっても知らないぞって脅すのよ。大丈夫かしら？鷹取は、善くない連中とも付き合ってるみたいだし、貴方が心配なの…私怖いわ。」

「そう言っと、しなだれ掛かる。そして、俺の顎を捉えると、

「で、想像した様な関係に、貴方は何時なつて下さるのかしら？」
「と言って、俺に口付けをした。ぽってりとした唇の感触と、侵入して来た舌の妙技に耐えながら、やっと唇を離れた環の耳元で俺は囁く。」

「俺は、あんたのものにはならないと、言った筈だ。」

「方眉を上げて唇を噛む環を残し、俺はソファアを立ち上がって言った。」

「だが、鷹取が仕掛けて来るなら、迎え打たせて貰うぜ。」

「何故なの…？」

「今迄、籠絡出来なかった男はいなかったのだろう。悔しそうな環が睨み付ける。」

「俺は、自分で女を選ぶ主義なんだ。」

「新しい酒を注ぎ、環は一気に煽った。」

「あんたも、早く鷹取なんかと手を切る事だ。」

「…どういう事？」

「俺が、何にも知らないなんて、思うなよ。」

「ひっ！」

「俺の矢の様な一瞥で、環はおののく。」

「このまま大人しくしていれば、あんたに手出しはしねえ。だが、お痛が過ぎると、身包み剥がされて、この屋敷から社交界からも放り出されるぜ。環さんよ。」

「なんですって!」

と立ち上がり、怒りを表す環の耳元で、俺は囁く。

「男爵は、全てご存知だ。」

環の身体が硬直する。

ノックの音がして、藤田が入って来た途端、

「わっ、私、先に休ませて頂くわ。」

と、バタバタとサロンを飛び出して行った。

「薬が、効き過ぎかもしれませんよ。」

「構わやしねえさ。あー、けったくそ悪りい!」

そう言っていると、俺は酒で口の中を消毒した。

一昨日、俺は瑠嘉に頼まれ、剣の稽古に付き合っていた。

すっかり子供らしさを取り戻した瑠嘉は、藤田の道場に通うのを楽しみにしている。

東屋には、稽古後に召し上がって下さいと、家政婦長が用意してくれた菓子や果実が置いてあった。

そこに稔がやって来て、菓子を食べ始めたのだ。

瑠嘉は、

「あー、稔。駄目だろう?ちゃんと断ってから食べない!」

と、兄貴振る。

「本当に、食いしん坊なんだな。」

と俺が笑うと、

「稔は小さいから、人の物でも直ぐに食べちゃうんだ。でも、みんな怒らないから、あっちこっちで盗み食いするんだよ。」

「人の物って…例えば?」

「使用人の部屋の菓子とか、僕のおやつとか…一番取られてるのは、お祖父様のお茶菓子だね。」

「男爵の?」

「お祖父様は、きつとわざと稔に取られる様にしてあげるんだよ。」

お茶菓子だけ残して、稔が取れやすい所に置いてあったりするもの。

それを聞いた俺は、東屋に飛んで行って、菓子を頬張っていた稔に聞いた。

「稔、この間饅頭食って、腹が痛くなつたよな？」

稔は、コクンと頷く。

「あの饅頭、何処から持ってきた？」

稔は、下を向いた。

「大事な事だ。何処かにあった物を食べたのか？」

稔は、何も答えない。

「稔……」

「西園寺さん、駄目だよ。稔、怖がってる。」

「瑠嘉、お前から聞いてくれないか？大切な事なんだ。」

「……わかった。稔、隠さずに西園寺さんに話してごらん？」

「……怒らない？」

「ああ、怒ったりするものか。」

「ホント？」

「本当だ。そうだ、今度稔の好きな菓子を買ってこよう。」

顔を上げた稔は、満面の笑みになる。

「僕、カステイラがいい！」

「ああ、わかった。」

「あれはね、お祖父様のお饅頭を買ったんだ。」

「お祖父様、部屋にいらっしゃったの？」

「うん。僕、お咲がお祖父様の部屋から出て来たから、きっとお菓子置いてったと思ったの。お祖父様、いつも僕にくれるから、だから……」

「置いてある饅頭を持って出たんだな？」

「うん。」

「饅頭食べたのは、何処だ？」

「稔は、自分の部屋で食べたんだ。僕がすぐに見つけて、家政婦長

を呼んだんだ。」

そういう事だったのか。

「瑠嘉、お前の部屋の水差しは、誰が変えるんだ？」

「えっ？色々だと思うけど……。」

「あの日、お前が倒れた日は？」

「わからない。」

「お咲だよ、きっと。」

稔が言う。

「見たのか？稔。」

うつんと被りを振って、稔は続けた。

「でも、お咲はしょっちゅう、お兄様のお部屋に居るもの。」

俺は、瑠嘉を見る。被りを振る瑠嘉。

「僕、知らない。」

「お兄様の居ない時には、しょっちゅう居るよ。僕が、何してるのって聞いたたら、内緒だって飴玉くれるんだ。」

「わかった、ありがとう2人共。」

そう言って、俺は藤田の元に急いだ。

原田咲は、藤田と俺に詰問されると、呆気ない程すらすと自供した。

恋人の堂本組構成員、時田洋次に言われ犯行に及んだ事。

饅頭は、環が買って来た事。

それ以上の情報は、広田咲からは引き出せ無かった。

俺は、直ぐに橘警部に連絡し、広田咲の身柄を引き渡した。

そしてすぐに、時田洋次が逮捕され、事件背後に堂本組と鷹取が居る事が判明。

鷹取と堂本組は、男爵と瑠嘉を殺害し、環を通して大鳥家の財産を自分達のいい様にしようという計画だったらしい。

きつと今頃は、鷹取の逮捕、堂本組の摘発が行われている頃だろう。

環が何処まで理解して関与していたかは分からないが、男爵はこれ以上の犯行を犯さないのであれば、稔の為に許す気にいるらしい。

「終わりましたね。」

「まあ、何とかな。」

「事務所には、いつ頃？」

「明日の夜には、退散出来るだろう。」

「了解しました。」

「藤田。」

「はい。」

「ご苦労だったな。」

藤田は、スッと頭を下げた。

第5章（1）

翌日、橘警部が報告の為に大鳥邸を訪れ、男爵に一部始終の報告を行った。

鷹取は逮捕出来たが、堂本組組長他数名には逃走されたらしい。

環にも近々事情聴取が行われるらしいが、当の本人は朝の内に小田原の別荘に行ってしまった。

夕方、大鳥邸の面々に惜しまれつつ、橘警部と藤田と俺は退散した。

「西園寺君、本当にありがとう。でも堂本組には、気を付けてくれよ。奴等、相当いきり立っていたそうだから。」

「わかってるよ、橘警部。精々気を付けるさ。」

乗り合いタクシーが、事務所の近くに止まっていた車の後ろに停車し、俺達は車を降りた。

停車していた車を通り過ぎ様とした時、

「剛さん。」

と、後部座席から呼び止められた。

「母上！どうして、この様な場所に？」

中の女性は俺達に会釈をすると、

「桜さんの荷物を、取りに来たんですよ。それよりも…」

そう聞いて、俺は1人急いで事務所に向かった。

事務所のドアを勢い込んで開けると、

「おう、お疲れさん。」

と、真吾が茶を啜っている。

「…来てるのか？」

そう問う俺に、真吾は黙って上を指差した。

どうしようも無く彼女に会いたい衝動と、会わずに行かせた方がいいという理性が葛藤し、足が動かない。

2階の部屋のドアが閉まる音がする。

廊下を歩く足音…。

階段の上に現れた彼女は、白地に黒いパイピングをあしらったワンピース姿で、旅行鞆と小太刀を持っていた。

階下の俺の姿に少し驚いた様だったが、ゆっくりと階段を下りて来た。

「元気に…していたか？」

今更ながら、間の抜けた挨拶をする。

彼女の身に起こった事を考えれば、元気も何もあつたもんじゃ無い。それでも彼女は、コクンと頷いた。

彼女の憂いを含んだ目が、俺を捉える。

俺は、次の言葉が思い浮かばず、思わず彼女に近付こうとした。

「桜…俺は…」

その時、藤田と橘警部が、事務所に転がり込んで来た。

「西園寺君！堂本組の連中が！」

「所長！襲撃です！」

彼等の言葉が終わらぬ間に、銃声と共にドアの硝子が割れる。

真吾は素早く柵より銃を出し、俺と藤田に投げて寄越す。

「お前は、裏から逃げろ！」

俺は、被りを振る桜を部屋の奥に向かわせ、銃を構えた。

「正当防衛だ！撃つて構わないぞ！」

橘警部の声が響く。

表から数人、入り込んで来たのがわかる。

その途端、激しい銃撃戦。

相手の1人は、被弾した様だ。

敵は弾が撃ち尽くされると、今度は合口を持って襲って来る。

俺達は、事務所の其処此処に隠してある木刀等で応戦する。

その時、裏で銃声がした。

「しまった！」

俺は、相手の眉間に一撃を与えると、裏に行こうとした。そこに、また新手が…。

「ちっ！」

焦る気持ちを抑えて、対峙する。

と、相手の体が、突然崩れ落ちた。

「！？」

其処には、血で濡れた小太刀を握る桜が立っていた。

「大丈夫か！」

と問う俺の言葉に、彼女は黙って頷く。

「お前は、此処に居ろ！動くなよ！」

そう、桜を部屋の隅に誘導した。

その時、新たな銃声と共に、一際大きな男が現れた。

片手に銃を持ち、片手で長物を肩に担ぎ、ギラギラとした目で事務所を見わたして叫ぶ。

「西園寺い！！」

「堂本だな？」

「何度も何度も俺達の邪魔しやがって！お前えだけは、許せねえ！！」

そう言うと、銃を撃ち放つ。

ギリギリでかわしながら、家具の間をすり抜ける。

堂本の背後から、真吾が一撃を見舞った。

その一撃を身に受けてなお、長物を持った手で、堂本は真吾を殴り飛ばした。

真吾の体が、家具と共に部屋の隅まで飛ぶ。

「真吾！」

藤田が、残党を片付けながら叫ぶ。

「この野郎っ！」

俺は、木刀で堂本に向かうが、奴の桁外れな力に押されてしまう。隙を見て、決まったかと思った途端、奴の蹴りをまともに食らい、

壁に激突する。

「がはっ！」

胃が裏返る様な衝撃。

そのまま奴は俺の側まで来ると、

「いい格好だなあ。」

と、笑う。

口から流れる血を拭い、立ち上がるとする俺を上から見下ろし、

「お前は、そのままジツとして、この現状を見ておけ。」

そう言くと、銃を取り出し、俺の太ももを撃ち抜いた。

「がっ！！」

太ももが火のついた様に熱い。

「キヤーーーーーッ！！」

と言う叫び声と共に、桜が俺に飛びつく。

「おっ、西園寺。お安くねえなあ。お前の、スケか？」

「桜、下がってる！」

「おお、いいねえ。そんな姿で、女を守れるのか？」

そう、下品な笑いを浮かべる。

「お前の目の前で、この女を慰み物にするってのも、いいよなあ？」

「てめえ！」

「いいねえ、その顔。」

俺に抱きついていていた桜が、スッと立ち上がり、堂本に向かって小太刀を構える。

「やめろ！桜！お前のかなう相手じゃない！」

俺は、叫んだ！

それでも、桜は構えを解かない。

「俺とやろうつてのかい？お嬢ちゃん？」

堂本は、ニヤニヤ笑って長物を手の中で回す。

「貴方の相手は、私がします。」

桜は、低いがしっかりした声で言い放った。

「面白れえ、気に入った！受けてやるよ。」

そう言うと、堂本も長物を構える。

「やめろ！桜！藤田、止めてくれ！」

「おっと、邪魔しないでもらいてえな。」

そう言うと、横から打ち込んで来る藤田を、難無く力でねじ込む。

しかし桜に向かっては、力を使う事無く、刀を合わせ傷を付ける事を楽しんでいる。

「いいねえ、西園寺！お前のスケは、最高だせ！」

そう言いながら、桜の身体を切り刻む。

かなりの出血と疲労で、桜の剣先は震え、肩で息をする状態だが、それでも彼女は構えを解かない。

「てめえ！いい加減にしやがれ！」

木刀を使って立ち上がった俺は、何とか一打打ち込むが、今度は肺腑に一撃をみまわれ、息が出来ない。

「お前は、そこで見てると言っただろう？」

倒れても何度も立ち向かう藤田と、白いワンピースを真っ赤に染めて立ち向かう彼女を、霞む目で見るしか無いのか？

その時、

「其処までだ！堂本！」

警官隊が突入し、堂本の背後から銃で狙いを定める。

「武器を捨てろ！堂本！」

しかし堂本は、上段の構えのまま俺に近付いた。

桜が、間に割って入る。

堂本は、不適な笑みを浮かべると、

「お嬢ちゃん、俺の心臓、貫いてみるよ。」

「！？」

間合いを取っている桜に向かい、再び挑発する。

「ほら、でないと、俺はあんたの大事な人を斬っちゃうぜ。」

一瞬の躊躇。

桜は、小太刀の構えを解いた。

「…賢いな、お嬢ちゃん。」

後ろでは、引き続き警官隊が警告を発していた。

「西園寺っ！」

そう堂本が叫ぶのと同時に、発砲される。

1発、2発：堂本は、倒れない。

4発、5発：上段の構えのまま、堂本の身体がゆらりと傾き、一歩近付いた瞬間、桜が俺に覆い被る様に抱きついていていた。

堂本の身体が倒れるのと同時に、

「桜！」

「市村！」

と、真吾と藤田の叫び声が聞こえる。

「……ご無事……ですか？」

「桜？」

「良かった……。」

そう、微笑みながら崩れ落ちる彼女を支えようと背中 hands を回した俺は、彼女の背中が切り裂かれ、大量の血が溢れ出しているのを感じた。

雷が身体を駆け巡る。

「さくらあーっ！っ！」

彼女を抱きかかえ、力の限り呼び続ける。

「今、救急隊が来ます！」

「マズいぞ、トシ。出血が酷い。」

「しっかりしろ、桜！」

俺達が口々に叫ぶ中、1人の男性が近付いて来た。

「父上！」

藤田が驚く。

藤田の親父さんは、黙って桜の身体を抱くと

「市村、分かるか？」

と声を掛ける。

桜は、荒い息の中頷いた。

「お前の身体では、もう保つまい。お前が望むなら、俺が引導を渡

してやろう。」

桜は、微かに微笑んだ。

「止めて下さい！父上！」

「親父さん、それはいけねえ！」

俺の身体の血が逆流する。

桜の小太刀を拾い上げ、今正に彼女の心臓に当てられる瞬間、俺は叫んでいた。

「やめろ！！斉藤！！お前が桜の命を絶つなんて、この俺が許さねえ！副長命令だ！！」

その瞬間、藤田の親父さんの身体がビクリと痙攣し、小太刀を置いて頭を下げた。

そして、

「喜べ、市村。お戻りになられたぞ。お前は、生きなければならぬ。分かるな？」

と、桜に言った。

桜は、親父さんの手を握って、涙を流す。

「お願いします。」

そう言って、彼女の身体を俺に渡して、藤田の親父さんは去って行った。

程なく来た救急隊の車で、俺達は桜を病院に運んだ。

手術室の片隅で、俺は自分の太ももの治療を受けていた。

弾は貫通しており、消毒だけをして貰う。

「あんたも縫わなきゃならんが、まずこのお嬢さんだ。」

そう言いながら、医者は彼女の体を拭きはじめた。

「先生、患者さんですが、麻酔が効きません。」

「濃度は？」

「最大ですが、意識を保ったままです。」

「マズいな……。」

「手術出来ないのか？」

「傷を診たところ、縫うだけで済みそうだが、麻酔無しではかなりな苦痛を伴う。それに、動かれると縫えないぞ。」

「押さえ付ける人手なら有るが。」

「そんな簡単な話じゃない！麻酔無しでは、拷問も同じだ。精神が崩壊する危険もあるんだぞ！」

「…それでも。」

「出血もかなり酷い。しかも彼女は女性だ。とても耐えられんだろう。」

「先生、それでも頼む！手術してくれ！」

「私には…責任が持てない。」

「責任は、全て俺が持つ。彼女の痛みも、精神が崩壊しても。」

「…見ている方も辛いぞ。」

「分かっている。」

「…承知した。押さえ付ける者を呼びなさい。」

俺は事情を話し、真吾と藤田に手術室に入って貰う。

真吾は足を、藤田に左腕と左肩を、俺は右腕と右肩をそれぞれ押さえる。

「手拭いを噛ませてやりなさい。」

桜の口に手拭いを噛ませると、俺は彼女の耳元で囁いた。

「済まない、桜。耐えてくれ、俺の為に。」

彼女が頷く。

「それでは、行くぞ。」

そう言つて医者は傷を消毒し始めた。

第5章（2）

彼女の口からくぐもった叫び声が発せられ、俺達を跳ね飛ばし体を反らせる。

「ちゃんと押さえてろ！縫う時は、こんな物では無いぞ！」

医者 of 怒号が響く。

俺達は、気合いを入れ彼女を押さえ付ける。

彼女は、一針縫う毎に呻き、玉の汗を流し、喘いだ。

俺達は、押さえ付けながら彼女を励ました。

「氣い失っちまった方が、楽だろうに…。」

「それは、無理だな。痛みで引き戻される。終わる迄、地獄の苦しみだ。」

「地獄の苦しみの後には、天国が来るんだよな？トシ。」

「…そうだな。」

「聞いたか？桜！お前、また事務所で一緒に働けるぞ！」

「それは…！」

「所長、市村は、我々と一緒に事務所に居る事が幸せだと、俺も思います。」

「変わったお嬢さんだ。こんな傷だらけになる職場、私だったら願ひ下げだがね。」

医者は、一針一針縫いながら言った。

「ほら、桜に約束してやれよ、トシ！」

「所長！」

「ああ…。」

そう言うのと、俺は彼女の耳元で囁いた。

「お前の居場所は、俺達の…いや、俺の所だ。戻って来い、桜。もう、何処にも行かせねえ。」

痛みに耐える彼女の右手が、俺の手を握り返した。

彼女は3時間激痛に耐え、そのまま昏睡状態に陥った。

「先生……」

「後は、彼女の気力と体力の問題だが、先程話した精神的な問題は、正直彼女が目覚めてみないと、何とも言えんな。」

「そうですか……」

「それより、君の足の傷も縫ってしまおう。その方が治りが早いからね。」

「先生、俺も……」

「麻酔無しで縫ってくれなんて、言わないでくれよ。あんな事は、もう懲り懲りだからな！」

「……わかりました。」

俺が麻酔から覚めると、枕元で真吾が大いびきで寝ていた。

「……うるさいぞ、真吾……」

その声を聞き、藤田が覗き込んだ。

「お目覚めですか？所長。」

「ああ、良く寝た気がする……」

「半日、寝ておられました。」

「そうか……お前達も、帰って休んでくれ。俺はもう大丈夫だ。」

藤田は、ちらりと真吾を見て、

「そうさせて頂きます。事務所も片付けなければなりませんし。」
と言った。

「ああ、悪いが頼む。……彼女は？」

「此方に……」

と、藤田がカーテンを開けると、隣のベッドに桜が寝ていた。

「医者から、モルヒネを投与するか、相談がありました。」

「モルヒネか……量は？」

「市村の場合、かなりの量を入れないと効果は無いとの事です。」

「だが、常習性が残ると？」

「はい。」

「…苦しいだろうが、止めさせるべきだろうな。」

「彼女には酷ですが、俺もそう思います。」

「わかった、その件は俺から話しておく。」

藤田が真吾を連れ帰った後、俺はベッドから起き桜の枕元に座った。うつ伏せになった彼女は、息が荒く玉の様な汗をかいていた。

傷の為に熱が出ているのだろう、俺は濡れた手拭いで顔や身体を拭いてやる。

全く無茶ばかりしやがる。

まあ、お前の無茶は、今に始まった事じゃない。

最初は、俺の周りをチヨロチヨロしていただけだったのに、何時の間にか俺の心に住み着きやがった。

殺伐とした日々の中、お前の笑顔が俺の、俺達の心の安らぎだったな。

あの頃、流山で近藤さんを失って、宇都宮の戦いで俺が無茶をしたばかりに、お前の背中に最初の傷を作っちまった。

あの時も、足を負傷した俺を庇ったんだっとな。

俺が療養から会津の前線に戻る時、お前を離しときや良かったんだ。だが、近藤さんを失って、俺はどうしようもない心の渴きを、お前の存在で満たさなければ、前に進めなかった。

白河、会津、仙台そして蝦夷まで、お前は齒を食いしばって付いて来た。

蝦夷で、流石に先が無いと思った時、鉄之助と一緒に落ちさせるつもりだったんだ。

蝦夷の遅い桜の時期だったな。

窓を開けると、満開の桜が咲き乱れ、部屋の中にも桜の花びらが舞い込んでいた。

お前は、泣いて泣いて…一晩中俺は抱き締めて、来世で必ず一緒になるうと約束し、俺の小太刀、堀川国広を与えて金打を打った。

決戦最後の朝、鉄之助と共に落ちたと思っていたお前が現れた時には、正直驚いた。

あの朝の俺の覚悟を、お前は直ぐに見抜いて、背を向けて時計を巻く俺の背中に抱き付くと、帰りを待っていると言った。

だが俺は、お前の言葉に何も返してやる事が出来なかった。

一本木関門で俺の腹に風穴が空いた時、俺は自分の思い通りに生きた、良い人生だったと思ったんだ。

心残りには、あそこに残したお前を、また泣かせちまう事だけだった…。

夏の終わり、俺達は事務所に帰って来た。

秋が深まっても、彼女の意識は戻らない。

正確には、起きて生活出来る様にはなっていた。

だが、意識が飛んでしまっていた。

何を見ている訳でも無く、何を話す事も無く、ただ幼女の様に、俺の姿だけを追っていた。

「入るぞ、トシ。」

そう言っただけで入って来た真吾は、俺達の姿を見て呆れた様に「また、抱いて寝てたのか？」

と、溜め息をつく。

ベッドに横たわる俺の胸には、桜が寝息を立てていた。

「こっやってないと、落ち着かないんだ。」

昼間は、俺が見える所に居るだけで安心する様になったが、夜になると俺を探し回り、おれの懐に入り込む。

一人で寝かせると、一晩中震えて翌朝には錯乱状態になる。

あまりに率直な感情に最初戸惑ったが、今では同じ部屋で過ごす様にしていた。

「しかし、これがあの桜かと思うぜ。」

真吾がニヤリと笑う。

「確かに、意識が戻ったら、絶対に見せてくれない姿だな？無意識ってなあ、恐ろしいもんだ。」

俺は、桜の髪を撫でながら言った。

「お前、楽しんでないか？」

「ああ、こんなに率直に俺を求める事なんざ、今だけだろうからな。恋人と娘を、同時に持った気分だ。」

「…本当の意味で、抱いてやって無いんだろ？」

「馬鹿やろう。俺は、幼女をいたぶる趣味はねえよ。それに、こいつには待たせちまったからなあ。今度は、俺が待つ番だと思ってな。」

「はっ！とんだマゾ野郎だぜ！」

「ぬかせっ！」

と、2人して笑い合う。

真吾に頼んだ彼女の調査は、正直驚くものだった。

調査出来たものだけで10件の屋敷で、短期間の奉公を続けていた。記憶が戻った今となつては、意味の無い調査を、俺は打ち切らせた。真吾は、例の魔女伝説は、実は桜なのではないかと、瞳を輝かせて興奮していた。

もしかしたら、伊豆に居た姉やも、彼女かもしれない…。

「で、どうなんだ？意識の方は？」

「時々、目の奥で、何か光る時がある…。以前に比べると、少し笑う様にもなつて来た。」

「そうか、少しずつ前進してるならいいんだ。」

「ああ、お前達にも負担を掛けるな。」

「なあに、藤田だって心得てる。心配するな。」

その時、

「……ん……」

桜が目覚めそうだった。

「トシ、ちよつと俺と代われ。」

そう言つと、真吾は俺をベッドから引きずり出し、桜の隣に寝そべつて、その身体を抱いてやる。

こいつは、昔からこんな悪戯が好きだ。

やがて、目を開けた桜に、

「おはよう、お姫様。今、お目覚めかい？」

と、聞いた。

しばらくじつと真吾の顔を見ていた桜の目に、みるみる涙が溢れる。

「わつ、わ、悪かつたつて！冗談だから！」

「幼女に冗談なんか、通じるか。馬鹿。」

そういうと、俺は桜に顔を見せた。

「悪かつたな、桜。俺は、ここに居る。」

俺の顔を見る桜の目に、チカチカと光が見えた。

俺が、そつと抱いてやると、その胸に飛び込み、声を上げて泣き出した。

「わつわつ、どうしたらいい？」

と、慌てふためく真吾。

確かに、今迄声を上げて泣くなど、激しい反応はしなかった。

「確かに、いい刺激にはなつたみたいだな。」

「大丈夫なのか？」

「ああ、2人にしてくれるか？」

真吾は、そつと部屋を出た。

なおも声を上げて泣きじゃくる桜の耳元で、俺は囁き続ける。

「桜、桜、落ち着け。あれは真吾だろう？」

「……」

「夕べから、お前の側にずっといたのは俺だから、心配するな。」

少しずつ声が小さくなる。

「愛してる、桜、ずっと一緒だ…愛してる。」

これまで何百回と言ってきた呪文。

この言葉が一番桜を落ち着かせるのを、俺は知っている。

「…。」

泣き止んだ桜が、じつと俺を見つめる。

俺を見上げる目に、焦点を合わせようとする。

俺は、彼女の唇を覆った。

差し込んだ舌に、彼女が答えた。

「…！」

俺の腕に力が入る。

唇を離し、彼女の耳元で囁く。

「桜、桜、目覚めたのか？」

「…ひ…じ…西園…寺…さん…。」

「桜っ…！」

俺達は、長い長い別離の時を埋める様に、唇を重ねた。

2人揃って事務所に出た俺達を、真吾と藤田はとても喜んでくれた。

真吾は、俺の判断が正しかったと彼女を抱き上げた。

藤田は、流れる涙を隠そうともせず、喜んでくれた。

久々に彼女に淹れてもらった日本茶を啜りながら、思い出話しが次々と後を絶たない。

「市村、我が家で話した事を覚えているか？」

「はい。」

「あの時、父はお前を守れ、死なせるなど言った。あの時俺は、誰か敵から守るのだと信じ込んでいたが…。」

「…。」

「あれは、お前自身から、お前の命を守れという事だったのだな？」

「宇都宮で私が負傷した後、斉藤さんにお会いした時、酷く叱られ

ました。もし、私が死んでしまつたら、副長がどんな思いをなさるか考え無かつたのかと。私は答えました。命を懸けて守りたいものがあるなら、私は自分の命を厭わないと。」

「…やはりな。」

「とても叱られましたけど、斉藤さんは言つて下さいました。自分が側に居る限りは、副長の為にお前の命を守つてやると…。」

「…。」

「藤田さん、ありがとうございます。」

「いや…。」

「それは、藤田がトシと桜の為に、頑張つたって事だよな。」

と、真吾が藤田の背中をバシバシ叩いて言う。

「…ああ。」

藤田は、照れくさそうに鼻の頭を掻いた。

第5章（3）

夜も更けて、真吾と藤田は、2人して夜の街へ出掛けて行った。
気を使いやがって…。

「それでは、私も休ませて頂きます。」

そう言つて、桜は以前使つていた客間に戻ろうとする。

「…何処に行くつもりだ？」

廊下にもたれ、腕を組んだまま俺は彼女に尋ねた。

キョトンとした桜が客間を開けると、其処は物置と化していた。

「えっ？あの…。」

「お前の部屋は、此処だ。」

俺は、自分の部屋のドアを開ける。

「でも、其処は所長の…。」

「だから…」

俺は桜の身体を抱き上げ、自分の部屋に入りベッドに座らせる。

「俺達は、ずっと一緒の部屋で生活してんだよ。」

彼女は、耳まで赤くなりながら、身をすくめて小さな声で言った。

「あ…でも、私、もう治りましたし…。」

そう言つて立ち上がる桜の手を捕まえる。

「…もう離さねえ。」

引き戻し、俺の腕の中に捕らえる。

身体を硬くする桜の耳元に、

「俺は、もう…待つ気はねえからな。」

と言つて押し倒す。

「でも、真吾さん達が…」

「帰つて来ねえよ。今夜はな…。」

そう言いながら、彼女の帯を解く。

どうすればいいか、震える彼女の耳元で、

「…嫌か？」

と尋ねると、彼女は被りを振った。

「…桜…。」

俺は彼女の耳朵を噛み、首筋に肩に、唇を這わせた。

秋の月が、彼女の肌を青白く照らす。

小刻みに震える身体が、彼女の喘ぎが愛しい。

「桜…愛してる。」

何度も何度も呟きながら、俺は彼女を自分のものにした。

終章

また春が巡って来た。

うららかな日差しが差し込む様になったある日、大鳥邸から使いの車がやって来た。

御前が、私と所長を邸に招きたいとの仰せだった。

私の胸は、チリチリと痛む。

御前とお会いするという事は、あの人の話になるという事。
御前はそれを、所長の前で話すというのか？

躊躇う私に、煙草をくゆらせ思案顔で聞いていた所長が声を掛ける。

「…わかった、伺おう。おい、出掛ける用意をして来い。」

「はっ、はい。」

車に乗り込んでも、所長は一言も話さず目を閉じていた。

ただ降りる間際、緊張する私の手を握り、

「俺は、大丈夫だ。お前が、気にする必要なんざねえよ。」

そう言うのと、少しはにかんだ様に笑ってくれた。

書斎に通された私達を、御前が歩み寄り包容する。

椅子を勧めながら、

「ここからが、一番の眺めなんだよ。」

そう言って、庭の桜に目を細める。

「立派な桜ですね。」

「山桜なんだよ。この季節は函館を思い出して、ここで散って逝った友と酒を酌み交わすんだ。彼は、あまり強くはなかったがね。」
「そうでしたね。」

互いに、はらはらと散る花びらを見て、しばらく感慨に浸る。

「私は……」

沈黙を破ったのは、御前だった。

「……ずっと君に済まないと思っていたんだ……。」

固く握られ手に目を落とし、御前は続けた。

「あの時……彼が亡くなって、小芝君が五稜郭まで遺体を運んで来た時の……君の叫びが……忘れられんのだよ。」

その刹那、あの時の情景がありありと思いだされる。

飛び交う砲弾と銃弾。

硝煙と土煙の匂い。

私は参謀本部の片隅で、彼の被弾、戦死の報を聞いた。

頭が真つ白になって、その場に崩れ落ちた私は、そこから耳を塞いでしゃがみこんだ。

不意に肩を掴まれ、彼の遺体が運ばれて来たと大鳥さんが知らせに来て、転がる様に部屋から走り出した。

床に敷かれた白い布の上に横たえられた彼は、苦しまなかったのだろうか、寝ている様にしか見えなかった。

しかし、腹の銃痕からの出血は酷く……私は、既に動く事のなくなつた彼の体に、傍目も気にせず取り縋って泣いた。

「あの時……君は『大鳥さん、私も撃ち殺して下さい！彼の元に、逝

かせて！！』と彼に取り縋って泣いて…」

ああ、そうだ…この人を、実はとても寂しがり屋なこの人を、一人では逝かせられないと…あの時の私には、その思いしか無かった。

溢れる涙を拭いもせず、私は桜を見ていた。

いつしか私も、両手が白くなる程固く握り締めていた。
隣から、そつと添えてくれる手が温かい。

「私はあの朝、彼と約束していた。もしもの時には、君を必ず落ち延びさせると…あの時の私には、その約束を果たす事で頭が一杯で、君自身を思いやる余裕は無かったんだ…。」

「しかたがありません。そういう状況でしたから…。」

「…彼の…時計は、今も持っているのかね？」

御前が、顔の下で組んでいた手から、少し目を上げて私を見る。

私は、上着のボタンを外し、懐に入っている懐中時計を取り出した。

「やはり、持っていたんだね…」

「そんなことを言っちゃいけない！君は、ここから直ぐに脱出するんだ！」

「嫌です！！後生だから、彼と共に逝かせて下さい！！」

「だめだ！僕は、彼と約束したんだ！君を必ず落ち延びさせると！」
揉み合う私達の足元に、彼の懐にあつた懐中時計が転がった。

合理的な一面を持つ、彼の愛用の品。

銃弾が掠めたのか、本体がへこんでいる時計を拾い上げて撫でる。
蓋を開けると、硝子にヒビが走り、時計は動かなくなっていた。

朝、彼は何時もの様に竜頭を巻いていた。

私は、食い入る様に文字盤を見る。

手が震え、涙で霞む…彼が、天に召された時間…。

「怨みますよ、大鳥さん！」

「なっ！！」

ピクリとも動かなくなつた時計を握り締め、私は言い放つた。

「あの人が居なくなつたら、私の時間も止まつたままなんですっ！！」

「あの時…君は、自分自身に趣を掛けたんだね…」

「…そんなつもりは毛頭ありませんが、確かにあの時から、私の中の時間は止まつてしまいました。」

「それだけ、彼との結び付きが強かつたんだな…深い所で…」

表を、春の風が吹き抜ける音が聞こえ、一斉に花びらが舞い上がる。
「あの後、君が彼の時計だけを持って姿を消してしまい、直に我々も投降せざるを得なくなり、私はどうして君を…君の希望を聞き届けてやれなかつたのかと、あれは私のエゴイズムでしか無かつたのではないかと後悔したよ。自ら命を断つ様な事になつたのではないか？官軍に捕らえられ酷い目に遭つたのではないか？彼との約束を果たせなかつたから、余計に思ひは募つた…」

「大鳥さん…」

「一年前、あの頃のままの姿の君に再会して、その思いを新たにしたのだ。君の40年という月日に、私はどう報いからいい？その事を、ずっと考えていたのだ。」

「確かに、絶望した事もあります。正直、自害しようとした事も。でも、思い直したんです。私は彼と金打を打って約束しました。来世で必ず一緒になろうと。ならば、出会えない筈は無いと。」

「やはり君は、あの頃と少しも変わっていないのだな…一途で、たおやかで、とても強い。」

「ありがとうございます。」

「今は…幸せなのだね？」

「はい…やっと出会える事が出来ましたから。それだけで、十分です。」

肩越しに微笑みを向けると、当たり前だという様に見つめ返す瞳がある。

「そうか…。」

そう呟いて、御前は席を立ち、大きな机に向かった。

「今日は、君に渡したい物があるのだよ。」

そう言くと、机から小さな小箱を取り出した。

「ずっと迷っていたのだがね。やはり、これを君に渡さなければいけないと思い直したのだ。開けてみなさい。」

少し古ぼけた、掌に乗る程の箱を開けると、中から女性用の懐中時計が出て来た。

銀の透かし彫りになった蓋の柄には、桜があしらわれていた。

「これは…？」

「この時計は、彼から君への贈り物だよ。」

「！？」

「彼が懇意にしていたロシア商船の艦長が、生前彼から依頼されていた物だそうだ。あれから恩赦で放免され、仕事で北海道に赴任していた時、艦長が私を訪ねて来てね…。」

その時、隣の席から大きなため息があり

「やっと出来上がったのか…。」

「所長？」

懐中時計を手に取りながら眺めると、

「いい出来じゃねえか。俺が図案を考えて、ザレコフに頼んだんだよ。ロシアの時計職人に作ってもらう様にな。」

「き、君は本当に…？」

御前は、大きく目を見開いて、両手をかざす。

「ああ、大鳥さん。苦労かけちゃったな。」

彼等は、その手をしっかりと握り、友情を確かめ合った。

「彼女が認めたのだ、疑っていた訳ではないが…それでも、記憶も引き継がれているのかね？」

「ああ、全てという訳では無いが、ふとした拍子に蘇る…特に、こいつと関わって以降の記憶は、鮮明にな。」

そう言つと、まるで悪戯つ子の様に肩をすくめて笑った。

「ああ、私はこの歳で懐かしい友との再会を果たせたのだな。」

大鳥さんの頬に涙が光る。

「ああ、浴びる程酒を酌み交わす約束も、果たしちゃいねえしな。

俺は、そんなに弱え訳じゃ無いんだぜ。」

「そうだった、そうだった。善は急げだ、すぐに酒の用意をさせよう！」

大鳥さんは嬉しくて仕様がないうという風に、顔を上気させて書斎を出て行つた。

私は、掌に懐中時計を乗せてみる。

少し小振りで、繊細な作り。

「素敵ですね…。」

「だろ？色々考えたんだ。お前に似合つた物を持たせてやりたくてな…。」

「ありがとうございます。」

「少し、外に出るか…。」

彼はそう言つて、書斎から庭に出る扉を開いた。

いつの間にか陽が傾き、茜色の空に桜が溶ける。

「その時計をお前に贈ろうと考えた時、俺は未来を思い描いた。笑つちまうだろ？先のねえ戦だと分かつてはいたんだがな、あの戦が終わつた後の、お前との未来を…希望を考えると、戦う勇気が湧いて来た。」

私は、時計を握り締めて聞いていた。

「全てが終わる頃、戦も仲間達の事も全てが終わる頃、その時計は出来上がって俺の元に届く筈だった。そして、お前に渡してやれる筈だった。」

戦の中で死ぬ事が侍としての本懐だと、公然と話すことをはばからなかった彼が、あの時その先の未来を考えていてくれていた。

私との未来を…。

私は、怖かった。

彼が私を残して死んでしまってもいいと考えている事が…。

私はずっと、その思いに捕らわれていた…この40年、ずっと…。

「貸してみな。」

私は、時計を彼に渡す。

「これからは、この時計が俺とお前の未来を刻むんだ。」

そう言くと、彼は時計の竜頭を巻いて、私の手に戻した。

ボタンを押すと、透かし彫りの蓋が跳ね上がり、文字盤に秒針が時を刻む。

彼の腕が柔らかく私に回され、その中に私は捕らえられる。

「待たせたな…。」

私は、彼の胸に顔をうずめ、被りを振った。

「俺が、二人分お前を幸せにしてやる。お前は、俺の腕の中にずっといる。いいな？」

耳元で囁かれる声に、また熱い涙が溢れる。

彼の腕に力が込められ、彼の鼓動が、私の鼓動に重なる。

そして、時を刻む音が…私の刻が動き始める…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6054m/>

桜の刻

2010年10月8日16時12分発行